余小路遺跡

神戸川(赤川)広域基幹河川改修事業
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成２０年(２００８)３月

島根県出雲県土整備事務所
出雲市教育委員会

余小路遺跡

神戸川（赤川）広域基幹河川改修事業
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成２０年（２００８）３月

島根県出雲県土整備事務所
出雲市教育委員会

序

出雲市では、島根県出雲県土整備事務所からの委託を受け、平成18年度に神戸川（赤川）広域基幹河川改修事業にともなう余小路遺跡の埋蔵文化財発掘調査をおこないました。本書は、その調査の報告です。

注目される成果として、江戸時代の墓を３基発見したことがあげられます。人骨と副葬品が残っていたばかりか、その中の１体の頭蓋骨内部には脳組織が残存していました。山陰では、きわめて珍しい事例です。

さらに、遺跡地の土壌について花粉分析をおこなったところ遺跡近傍の自然環境の変動や、当時の農耕のようすをうかがうことのできる結果がえられました。

今回の調査結果が、地域の歴史を解明する一助となり、文化財への理解や歴史学習を深めることに役立てば、幸いです。

最後ではありますが、発掘調査および本書の作成にあたり、ご協力、ご指導をたまわりました地元の方々および島根県出雲県土整備事務所ならびに関係各方面に対しまして、心より、感謝申し上げます。

平成20年（2008）３月

出雲市教育委員会

教育長　黒目　俊策

例　言

1．本書は、島根県出雲県土整備事務所の委託をうけて、出雲市教育委員会が平成18年度に実施した、神戸川（赤川）広域基幹河川改修事業にともなう余小路遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査地の所在地、調査面積、調査期間は以下のとおりである。

東区：出雲市松寄下町681-3ほか、520㎡、平成18年（2006）６月19日～８月31日。

西区：出雲市松寄下町682-2ほか、830㎡、平成18年（2006）８月18日～12月28日。

3．調査の工程および調査体制は以下のとおりである。

調査の工程

平成18年度　　現地発掘調査および整理作業

平成19年度　　整理作業および報告書作成作業

調査体制

調査主体　出雲市教育委員会・出雲市文化観光部文化財課

調査指導　西尾克己（島根県教育委員会文化財課　企画幹、平成18年度）

勝部智明（島根県教育庁文化財課　文化財保護主事、平成18年度）

事務局　石飛幸治（出雲市文化財課　課長）

花谷　浩（　同　学芸調整官、文化観光部次長、平成19年度）

川上　稔（　同　主査兼埋蔵文化財係長、平成18年度）

景山真二（　同　埋蔵文化財係長、平成19年度）

調査員　遠藤正樹（　同　主事）

坂根健悦（　同　嘱託員）

調査補助　高橋誠二（　同　臨時職員）

勝部真紀（　同　臨時職員）

発掘作業　青木　孝、浅田　進、安食　勉、坂垣将信、今岡春義、岩谷幹夫、大野隆幸、小村保夫、景山嘉一、金森光雄、岸　玉恵、土肥源市、藤江実、星野篤史、前島利輝、槙原春夫、三嶋文子、森山矢市、米田　建

整理作業　飯国陽子、今岡佳織、遠藤恭子、妹尾順子、中島和恵、永田節子

4．発掘調査および報告書作成にあたって、次の方々からご教示をえた。（順不同敬称略）

廣江耕史、角田徳幸、守岡正司、伊藤　智（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）

5．本書の編集および執筆（第４章を除く）は、坂根と花谷がおこない、景山、遠藤と勝部の協力をえた。

6．自然科学的調査は、以下のとおりに委託した。

東区木棺墓の人骨分析と１号墓の脳の保存処理：

国立大学法人鳥取大学（医学部機能形態統御学講座形態解析学分野井上貴央教授）

出土木製品と木材の樹種同定：株式会社吉田生物研究所

土壌分析および花粉分析：文化財調査コンサルタント株式会社

これらの成果は、第４章に掲載した。報告を作成いただいた、

鳥取大学医学部機能形態統御学講座形態解析学分野・井上貴央教授、江田真毅氏、

鳥取大学医学部技術部・足立昭子氏、㈱吉田生物研究所・汐見　真氏、白﨑泰子氏、

文化財コンサルタント株式会社・渡辺正巳氏

に深く感謝いたします。

7．本書に掲載した遺跡写真の撮影は坂根と遠藤、遺物写真は坂根による。

8．本書に掲載した遺物の実測は、おもに勝部真紀がおこない、坂根が補助した。

図面の浄写は、飯国と妹尾がおこなった。

9．本書に掲載した遺物、実測図および写真は、出雲市教育委員会で保管している。

10. 本書の遺構図の座標値は、世界測地系の平面直角座標系第Ⅲ系によった。日本測地系による島根県教育委員会調査分の余小路遺跡報告とは、座標値が一致しない。

目　　次

第１章　調査にいたる経緯と経過…… 1

第２章　遺跡の位置と環境…… 2

第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 2

第２節　遺跡の歴史的環境 …… 3

第３章　発掘調査の成果 …… 5

第１節　調査の概要 …… 5

第２節　東区の遺構と遺物 …… 9

第３節　西区の遺構と遺物 …… 22

第４章　自然科学的調査の成果 …… 27

第１節　出雲市余小路遺跡から検出された人骨について …… 27

第２節　余小路遺跡出土木製品の樹種調査結果 …… 32

第３節　花粉分析の成果報告 …… 41

第５章　結　語 …… 46

付　表

図　版

挿図目次

図１　調査地位置図（１：100,000）……３
図２　調査区位置図（１：5,000）……６
図３　調査区配置図（１：500）……７・８
図４　東区東壁土層断面図（１：80）……９
図５　東区１ライン土層断面図（１：80）……９
図６　東区平面図（１：200）……10
図７　東区木棺墓配置図（１：40）……11
図８　東区１号墓実測図（１：15）……11
図９　東区１号墓副葬品出土状態図（１：15）……12
図10　東区１号墓底部竹組実測図（１：15）……12
図11　東区１号墓副葬品実測図
（１～５＝１：３，６～21＝１：１）……13
図12　東区２号墓実測図（1：15）……14
図13　東区２号墓副葬品出土状態図（1：15）……15
図14　東区２号墓底部竹組実測図（1：15）……15
図15　東区２号墓副葬品実測図（１～４＝１：３，
５＝１：４，６～51＝１：１）……16
図16　東区３号墓実測図（1：15）……17
図17　東区３号墓副葬品出土状態図（１：15）……18
図18　東区３号墓底部竹組実測図（１：15）……18
図19　東区３号墓副葬品実測図（１：３）……19
図20　東西溝ＳＤ01～03実測図（平面＝１：60，
断面＝１：40）……20
図21　東西溝ＳＤ04，土坑ＳＫ01実測図
（平面＝１：60，断面＝１：40）……21
図22　Ｐｉｔ01～04実測図（１：60）……21
図23　東区出土遺物（１：３）……21
図24　西区遺構図（１：200）……22・23
図25　ＳＸ01・02実測図（１：60）……24
図26　ＳＸ01出土遺物（１：３）……24
図27　東西溝ＳＤ03・07，土坑ＳＫ04実測図
（１：60，溝断面１：30）……25
図28　ＳＤ03・07，ＳＫ04出土遺物（１：３）……25
図29　西区包含層出土土器（１：３）……26
図30　１号墓の頭蓋骨から発見された脳の検出状況
……28
図31　容器に入れて氷温庫に保存していた頭蓋骨と脳
……28
図32　保存処理を終えた頭蓋骨（右）と脳（左）…29
図33　保存処理が完成して、頭蓋骨に収納した脳　29
図34　顕微鏡写真（1）……35
図35　顕微鏡写真（2）……36
図36　顕微鏡写真（3）……37
図37　顕微鏡写真（4）……38
図38　顕微鏡写真（5）……39
図39　顕微鏡写真（6）……40
図40　余小路遺跡近辺の等高線図と
トレンチ内試料採取地点……43
図41　№１地点の花粉ダイアグラム……44
図42　№２地点の花粉ダイアグラム……45

表 目 次

表１　出雲市余小路遺跡出土木製品同定表……34
表２　微化石概査結果……43
付表１　東区１号墓出土数珠計測表……48
付表２　東区２号墓出土数珠計測表……48

図版目次

図版１　東区（1）
図版２　東区（2）　１号墓
図版３　東区（3）　２号墓
図版４　東区（3）　３号墓ほか
図版５　西区
図版６　出土遺物（1）
図版７　出土遺物（2）

第１章　調査にいたる経緯と経過

昭和47年（1972）７月10日に発生した大水害は、梅雨前線による豪雨がもたらした未曾有の災害であった。被害は、死者12人、家屋の全半壊114戸、床上下浸水29,491戸、浸水農地面積11,204haにのぼり、松江市内の低地部や出雲平野部は完全に水没、出雲空港は10日間にわたって閉鎖された。

この大水害に直面した島根県では、昭和50年（1975）10月、「斐伊川・神戸川治水に関する基本計画」を策定した。その柱の一つが、斐伊川神戸川放水路の建設と両河川の改修である。

神戸川改修にともない、島根県は出雲県土整備事務所事業の一つとして「神戸川（赤川）広域基幹河川改修」を実施した。赤川は神戸川の支流で、今回の調査地の西方では南東方向から塩冶赤川が合流する。

平成16年（2004）７月に島根県出雲土木建築事務所（当時）から、「神戸川（赤川）広域基幹河川改修」にともなう埋蔵文化財の事前調査依頼が出雲市にあった。現在、高瀬川と並走して流れている赤川を南に移し、旧ＪＲ大社線の線路敷きに沿うように付け替え、塩冶赤川との合流点も変更する計画である。

当該地域には、余小路遺跡が存在する。余小路遺跡は、国道９号出雲バイパス建設予定地の遺跡分布調査によって確認された遺跡であり、バイパス建設予定地部分については、すでに島根県教育委員会が発掘調査を実施している（宮澤ほか2007）。このため、出雲市（文化企画部文化財課、当時）では、事前の試掘調査を必要とすると判断した。さらに、平成17年（2005）４月あらためて平成18年度から３ヵ年分の工事予定地（計15,000㎡）について出雲県土整備事務所からの依頼があり、同年５月に試掘調査を実施し、本調査が必要と回答した。

これをうけて、平成18年（2006）４月に平成18年度の発掘調査を受託契約し、調査面積の縮小（５月）を経て、６月19日から現地調査に着手した。

現地での発掘調査は東区から着手し、８月31日に終了した。西区は８月18日に開始し、12月28日に完了した。この間、東区で出土した木棺墓の人骨については、８月25日に鳥取大学医学部井上貴央教授を招聘して取り上げ作業をしていただいた。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

余小路遺跡は、出雲市街の西端、ＪＲ出雲市駅の西約３kmにあり、沖積平野中の標高４ｍ前後の自然堤防上に立地する。遺跡の北側には、高瀬川と赤川が並んで流れている。高瀬川は、大梶七兵衛の指揮のもと貞享四年（1687）に竣工した人工河川である。

一方、遺跡の南側では塩冶赤川が蛇行しながら南東から北西へと流れている。この塩冶赤川は、神戸川の旧河道を踏襲した川である。神戸川は『出雲国風土記』に、

「神門川。源は飯石郡の琴引山より出づ。北に流れ、即ち来島・波多・須佐の三郷を経て、神門郡余部郷の間土村に出づ。即ち、神戸・朝山・古志等の郷を西に流れ、水海に入る。即ち、年魚・鮭・麻須・伊具比有り。」

とある。奈良時代の河道については、現流路より南であったと推測されている（永田編1997）。

「神門川」および「出雲大川」（現・斐伊川）は、ともに西流して、「神門水海」とよばれた入海に注いでいた。余小路遺跡の北にある白枝本郷遺跡の状況をみると、このあたりは縄文時代後期には陸化し、弥生時代中期中葉には付近に集落が成立していたらしい。南西に「神門水海」に臨む土地であったと考えられる。余小路遺跡にも古墳時代の土器が少量ある。

神戸川の奈良時代以後の変動を詳細にたどる資料はなく、「神門水海」がいつごろから現在の神西湖へと姿を変えたのかは明らかでない。しかし、宝治二年（1248）の杵築大社造営時のものと推測される「絹本著色出雲大社并神郷図」（国重要文化財）には、雲で隠されているが、菱根池はあるものの入海は描かれていない。おそらく、このころには入海はかなり縮小してしまっていたのではないだろうか。神戸川が現在の流路に固定された時期は、慶長年間（1596～1615）あるいは永禄年間（1558～1569）と推測されている。すくなくとも、16世紀前半以前には、この余小路遺跡の地は神戸川の河道に近接した位置を占めていた。それは現地形によく残っている（図２）。

遺跡地周辺の微地形をみると、標高４ｍの等高線が遺跡地周辺で現在の塩冶赤川流路に沿うようにして大きく南東に入り込んでいる。さらに、塩冶赤川の左岸に沿って、この等高線が西方に大きく突出している。これは、自然堤防の微地形を反映したものであり、同じく、高瀬川が貫流する北側の微高地も自然堤防である。このような余小路遺跡の立地環境は、発掘調査の過程で実施した土壌分析の成果にも現れている（第４章第３節）。

以上のような遺跡の立地環境は、この遺跡の消長とも密接な関係をもっている。島根県が平成17年度におこなった調査では、遺跡の開始が16世紀後半とされており、神戸川の付け替えと連動した余小路遺跡の一面がうかがえる。

第２節　遺跡の歴史的環境（図１）

余小路遺跡の歴史的環境は、地理的環境とも密接に連関している。出雲平野西部に大きな面積を占めた入海「神門水海」は、日本海岸の良港として多くの人と物資を集散した。入海の縁辺には多数の弥生時代集落が点在し、それらの遺跡からは、防長地域、吉備地域あるいは北部九州などの土器のほか、朝鮮半島の瓦質土器（古志本郷遺跡（34））もみつかっている。余小路遺跡の北にも中期から後期に白枝本郷遺跡（２）があった。

これらの遺跡のうち、下古志遺跡（38）や古志本郷遺跡などでは、古墳時代初頭に大量の土器が投棄され集落が廃絶したようすがみつかっている。平野部の集落のなかには衰退に向かったものがあったようである。安来平野などでは、集落の立地が平野部から丘陵部へと移ることが知られており、出雲平野でも同じような動きがあったか、今後の検討がまたれる。

弥生時代後期から終末期（西暦３世紀）の墳墓は、西谷墳墓群（19）において大規模な四隅突出型墳丘墓があり、西部出雲地域の「王墓」にふさわしい内容をもっている。西谷３号墓などから出土した土器は、広域にわたる交流をものがたり、当地の隆盛を今に伝えている。

古墳時代前期末（４世紀末）には、出雲平野の北に大寺１号墳（59、前方後円墳）、南に山地古墳（48、円墳）などが出現するが、その規模内容は、荒島古墳群（安来市）や神原神社古墳（雲南市）にはおよばない。しかし、上長浜貝塚（51）の陶質土器などをみると、広範な交流・交易は引き続きおこなわれていたようだ。

古墳時代後期（５世紀末～６世紀末）には、神戸川と斐伊川にはさまれた現出雲市街南部の今市および塩冶の地域に、今市大念寺古墳（17）や上塩冶築山古墳（22）など大型の古墳が継続して築造される（今市塩冶古墳群）。また、神戸川左岸にもこれらに次ぐ、妙蓮寺山古墳（40）などがあり（古志神門古墳群）、古墳分布から地域社会の構造が復元できる。この時期の集落分布はまだ不明な点も多いが、弥生時代以来の平野部の拠点集落・矢野遺跡では、この時期および続く飛鳥時代（７世紀）の遺物がかなり多量に出土する。

この矢野遺跡（６）は、『出雲国風土記』に神門郡八野郷の中心村落跡と目されるので、『出雲国風土記』の郷分布を古墳時代後期にさかのぼらせて考察することも可能であろう。

奈良時代の遺跡で近年注目されるのが、平野北部の青木遺跡（60）や山持遺跡（61）である。いずれも木簡や墨書土器、板絵などといった資料がみつかり、出雲平野部の集落や行政組織、あるいは信仰の姿などを垣間見せてくれている。『出雲国風土記』との総合的な研究が進んでいる（野々村編2006）。

平安時代以降には、出雲大社や鰐淵寺などの所蔵文書から地域史を描くことができるが、遺跡は文書に現れない分野、とくに陶磁器などに交易のあり方をさぐることが必要とされている。

国引き・国譲りの神話に代表され、神々の故郷とされる出雲平野だが、そこに住まい、あるいは行き来したのは、神ばかりではなく、われわれ出雲市民の祖先・先達であったことを、忘れてはならない。

1	**余小路遺跡**	14	善行寺遺跡	27	上塩冶地蔵山古墳	40	妙蓮寺山古墳	53	原山遺跡
2	白枝本郷遺跡	15	天神遺跡	28	半分城跡	41	田畑遺跡	54	菱根遺跡
3	壱丁田遺跡	16	神門寺境内廃寺	29	三田谷遺跡	42	宝塚古墳	55	鹿蔵山遺跡
4	小畑遺跡	17	今市大念寺古墳	30	光明寺３号墓	43	知井宮多聞院遺跡	56	出雲大社境内遺跡
5	白枝荒神遺跡	18	向山城跡	31	大井谷Ⅱ遺跡	44	神門横穴墓群	57	中村１号墳
6	矢野遺跡	19	西谷墳墓群	32	小坂古墳	45	浅柄遺跡	58	上島古墳
7	小山遺跡	20	菅沢古墓	33	朝山古墓	46	浅柄Ⅱ遺跡	59	大寺古墳
8	渡橋沖遺跡	21	瀧谷山城跡	34	古志本郷遺跡	47	北光寺古墳	60	青木遺跡
9	蔵小路西遺跡	22	上塩冶築山古墳	35	古志遺跡	48	山地古墳	61	山持川川岸遺跡
10	姫原西遺跡	23	上塩冶横穴墓群	36	放レ山古墳	49	三部竹崎遺跡	62	後谷遺跡
11	中野美保遺跡	24	築山遺跡	37	栗栖山城跡	50	御領田遺跡	63	上ヶ谷遺跡
12	荻杼古墓	25	狐廻谷古墳	38	下古志遺跡	51	上長浜貝塚	64	天寺平廃寺
13	海上遺跡	26	大井谷城跡	39	浄土寺山城跡	52	南原遺跡	65	平野Ⅰ遺跡

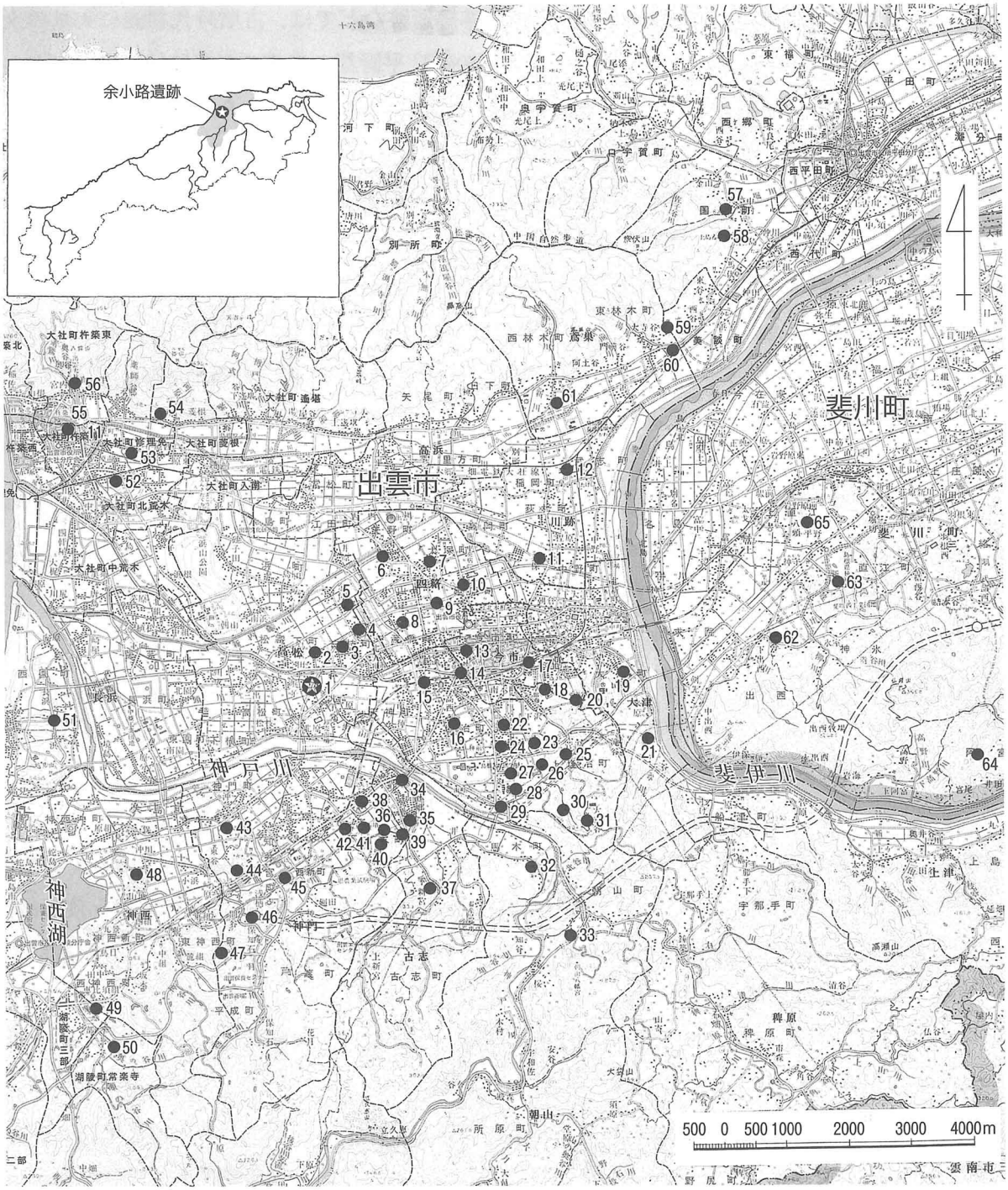


図１　調査地位置図（１：100,000）

第３章　発掘調査の成果

第１節　調査の概要

余小路遺跡は、平成16・17年（2004・2005）度に島根県教育委員会によって、すでに一部の発掘調査がおこなわれ、平成19年度にも調査が実施されている（図２・３、宮澤ほか2007）。

平成16･17年度の調査は、国土交通省中国地方整備局松江道路事務所が計画した国道９号（出雲バイパス）の建設にともなうものであり、調査面積は約4500㎡であった。調査により、室町時代から江戸時代にいたる掘立柱建物、木棺墓、溝や土坑がみつかったほか、弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、古銭など多数の遺物が出土した。みつかった遺構は４時期、すなわち、Ⅰ期（16世紀後半から17世紀前半）、Ⅱ期（17世紀前半から17世紀中頃）、Ⅲ期（17世紀中頃から17世紀後半）、Ⅳ期（17世紀後半以降）に区分できると報告されている。

島根県調査区Ⅰ区にはⅠ期からⅡ期にかけて７棟の掘立柱建物が重複し、Ⅱ区でもⅡ期からⅢ期にかけてコ字形の溝に囲まれた掘立柱建物が確認された。また。Ⅳ期には、Ⅱ区の東南部に木棺墓が群集することもわかった。

今回の調査は、国道９号出雲バイパスの建設によって付近を流れる塩冶赤川の改修がおこなわれるのにともなって計画された。このため、今回の調査区は、東区が県調査Ⅰ区の東側、そして西区が県調査Ⅰ区の西側に位置しており、既往の調査結果と関連する調査成果が期待された。

調査対象地は、もとは水田だったが、現状ではそのうえに盛土がなされている。

東区は、工事範囲について試掘をおこなった結果、工事範囲の南側では遺構・遺物とも確認されず、また湧水も激しかったため、調査区を北側に限定した。調査面積は、520㎡である。調査区の層序は、旧耕作土・床土の下に、灰褐色粘質土および細砂をはさんだ灰色粘質土があり、その下層にある青灰色粘質土の上面で遺構を確認した。おもな遺構は、木棺墓３基のほか、溝、土坑、ピットなどである。木棺墓には、被葬者の人骨と副葬品も残っていた。そのほか、中世から江戸時代の陶磁器および土師質土器が出土したが、その量は少ない。

西区は、830㎡の調査区を設定して調査に着手したが、調査区の東南部はすでに大きく撹乱をうけており、遺構は残っていなかった。調査区の層序は、旧耕作土・床土の下に灰色粘質土があり、いったんこの上面で遺構検出をおこなって溝や土坑を確認したが、遺構はまばらにしかみつからなかった。いずれも江戸時代以後のものである。さらに、その下層の青灰色シルト層の上面でも遺構検出をおこなったものの、顕著な遺構はなかった。西区では、遺物はほとんどが包含層から出土し、遺構から出土したものはわずかであった。

図２　調査区位置図（１：5,000）

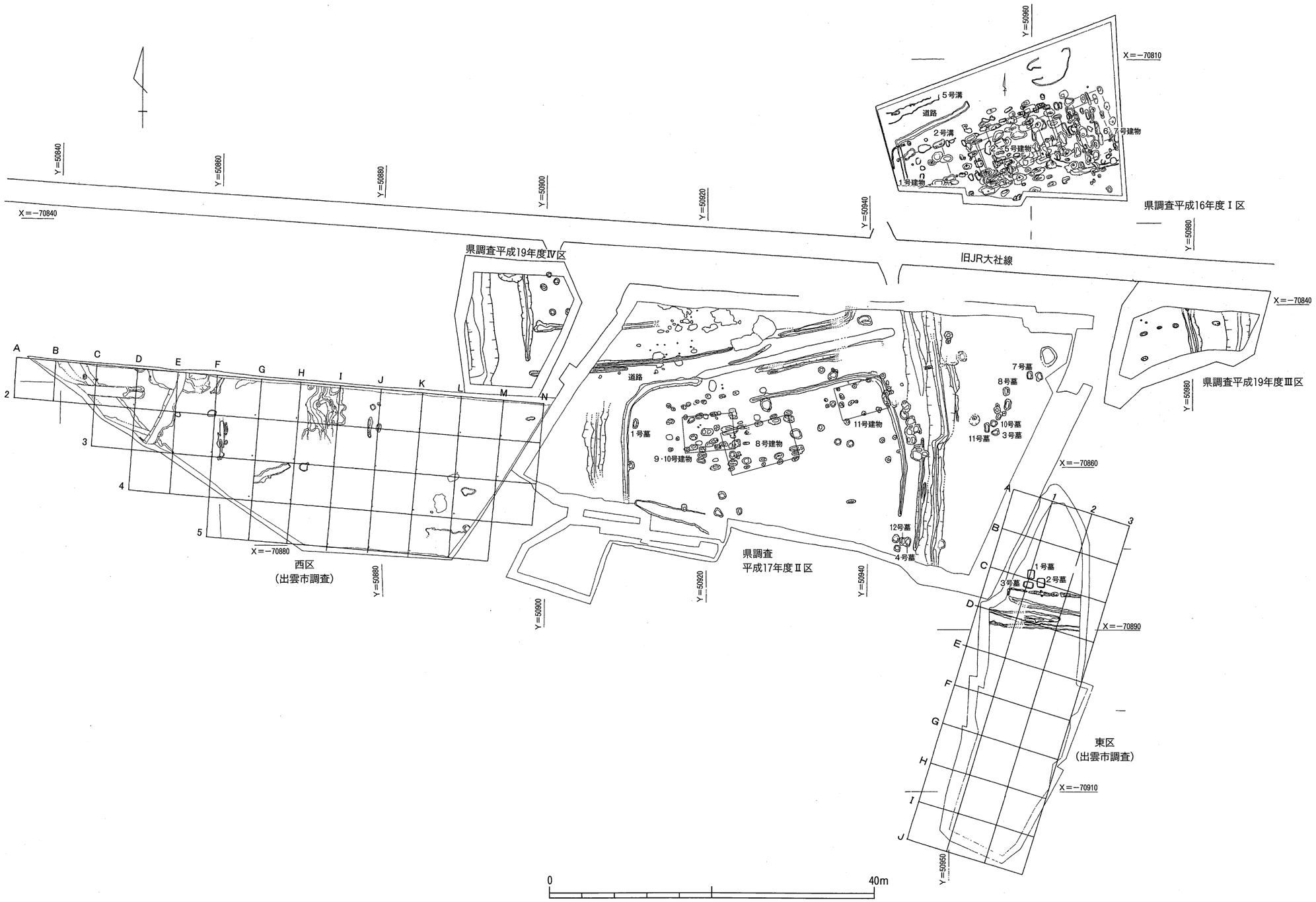


図３　調査区配置図（１：500）

第２節　東区の遺構と遺物（図３～６、図版１～４・６・７）

調査区はもと水田であり、旧耕作土と床土の下には、灰褐色粘質土（厚50～60㎝）と灰色粘質土（厚30～50㎝）が堆積する。灰色粘質土の下層、青灰色粘質土以下は基盤層（地山）。基盤層は青灰色粘質土層以下、粘土と砂の互層になっており、河川氾濫による堆積層であろう。

東区は、北部（国土座標Ｘ＝－70890以北）に東西溝４条と木棺墓３基がある。東西溝ＳＤ03とＳＤ04は灰色粘質土の上層から掘削され、ＳＤ01は灰色粘質土の下から掘削されている。

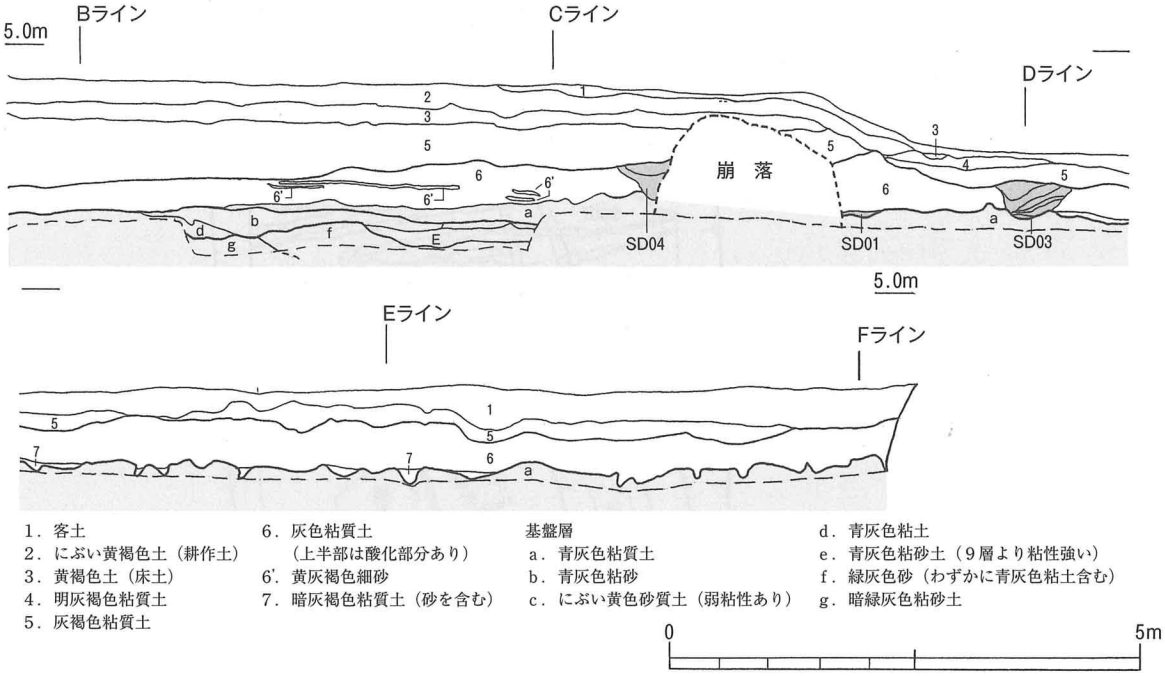


図４　東区東壁土層断面図（１：80）

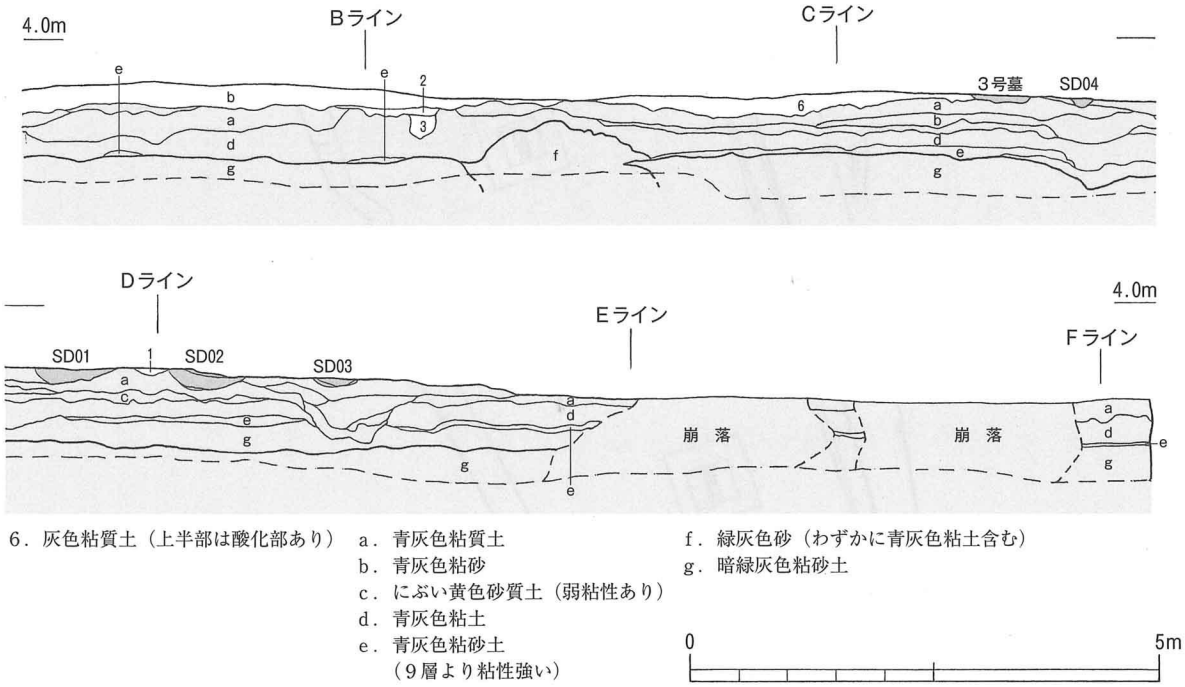


図５　東区１ライン土層断面図（１：80）

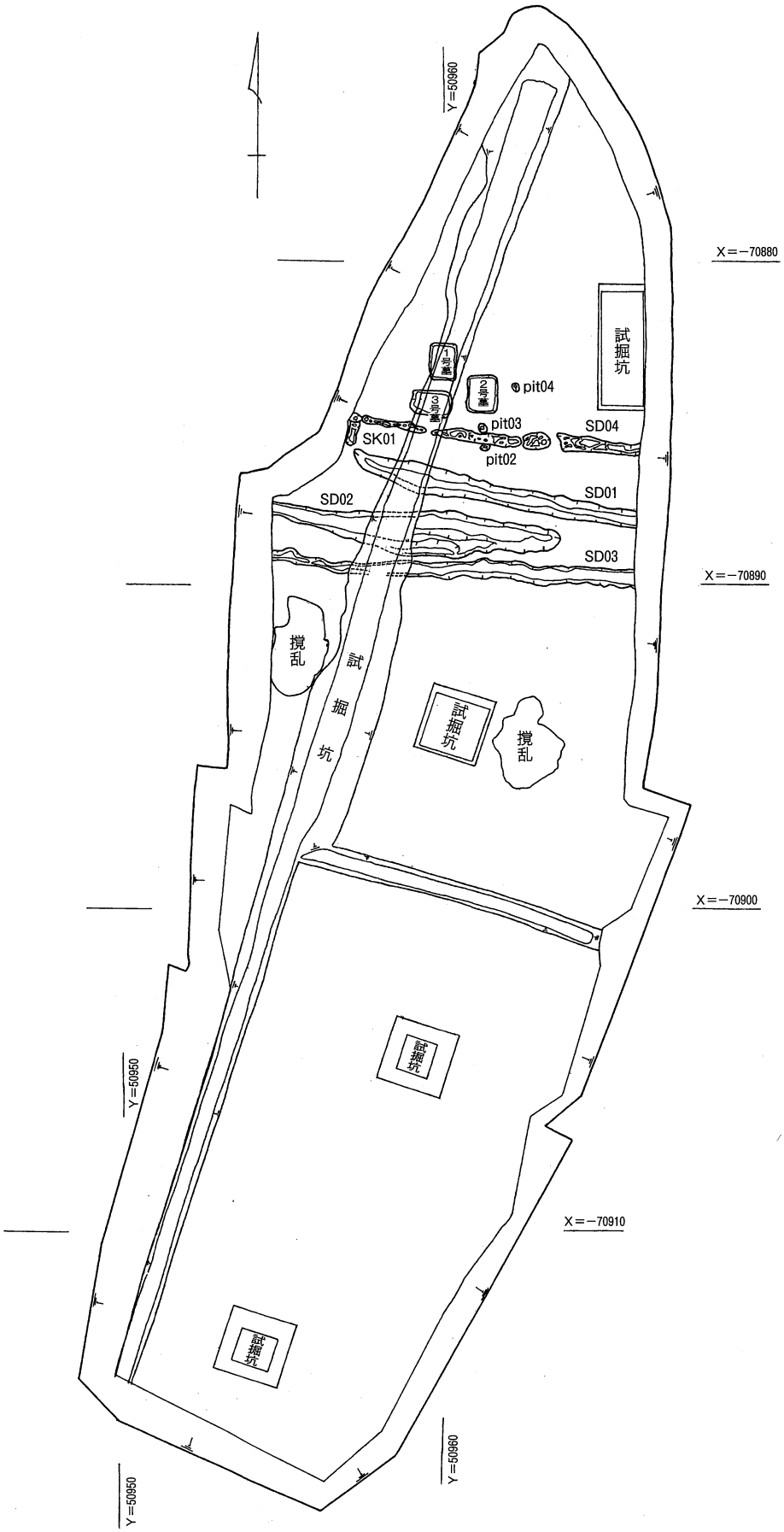


図6　東区平面図（1：200）

(1) 近世木棺墓（図７、図版１～４、６・７）

３基の木棺墓があり、人骨などが出土した。

人骨に関する詳細は、第４章第１節を参照。

１号墓（図８～11、図版２・６）

北側にあって主軸を南北に向ける。

長辺1.07m、短辺0.78mの長方形の掘形の中に、マツ板材を長辺0.93m、短辺0.62mに組んだ棺が組まれている。掘形は深さ15cmが残り、蓋は残存していない。底板はなく、竹組の装置が残っていた。竹組は長辺方向に９本、短辺方向に２本を井桁にし、その下には対角線方向×形にもう２本を組ませたものである。竹の薄材で緊縛してあった。

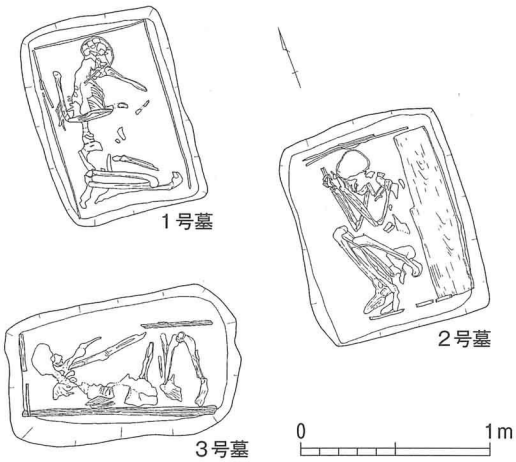
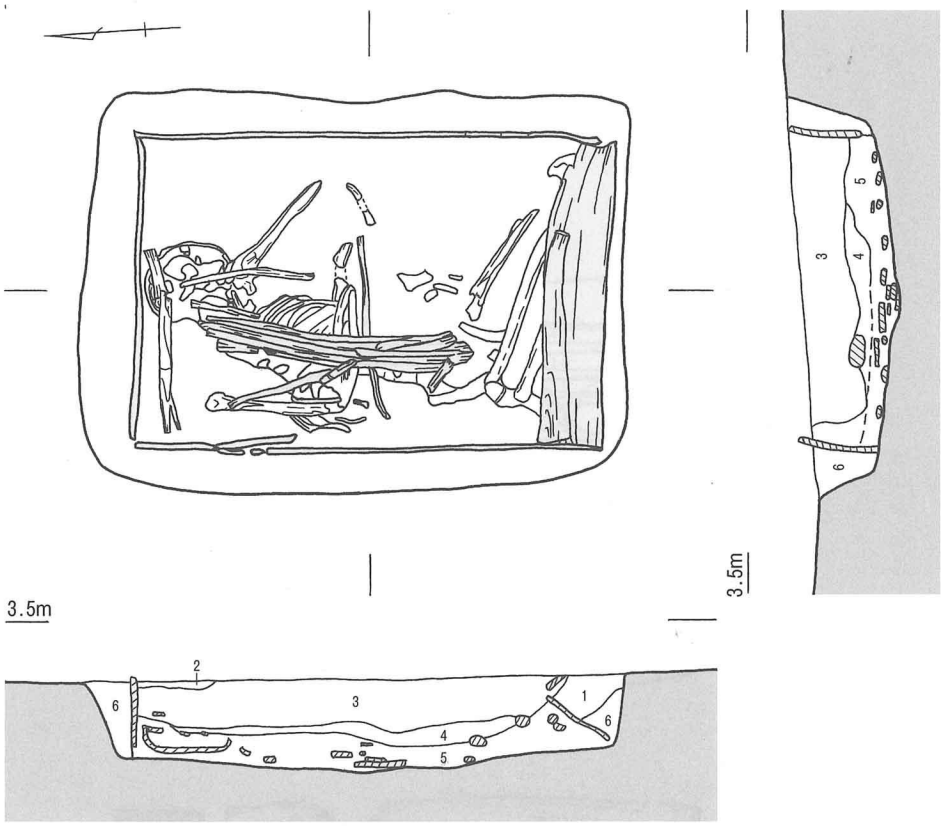


図７　東区木棺墓配置図（１：40）

遺骸は屈葬され、頭を北、顔面を東に向ける。頭蓋骨内部には脳組織が一部残存した。

人骨の右上腕骨の上、および脊椎骨と西側の側板との間から、土師質土器が１点ずつ出土した。また、上下の肢骨の間、被葬者の腹部あたりからは、櫛３点と数珠玉16点が出土した。



1．灰色粘質土（黄褐色細砂混じる）
2．オリーブ灰色粘質砂
3．オリーブ黄色粘質砂
4．灰青灰色粘質砂
5．暗オリーブ灰色粘質土（黄褐色細砂混じる）
6．灰色粘質砂

0　1m

図８　東区１号墓実測図（１：15）

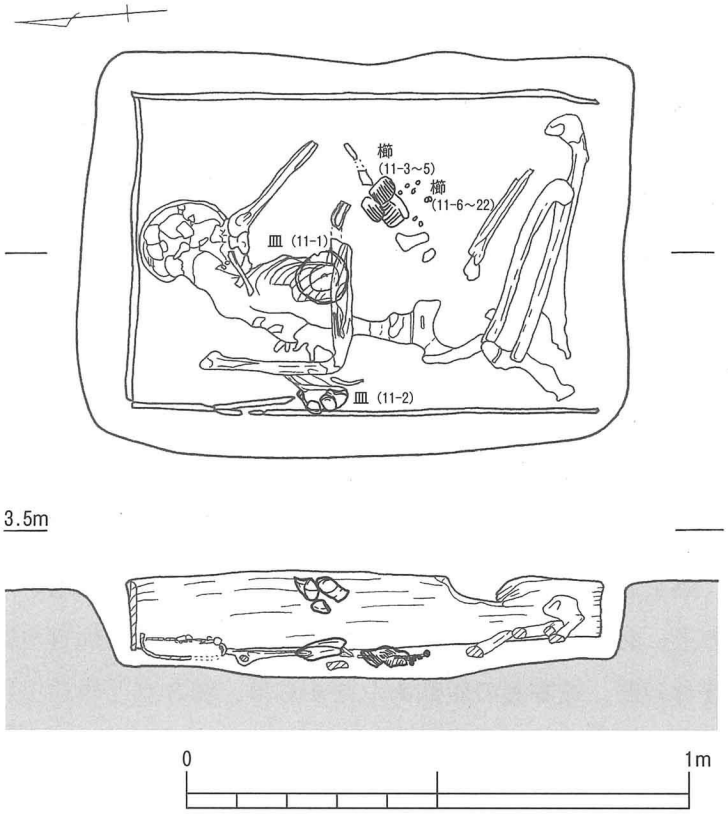


図９　東区１号墓副葬品出土状態図（１：15）

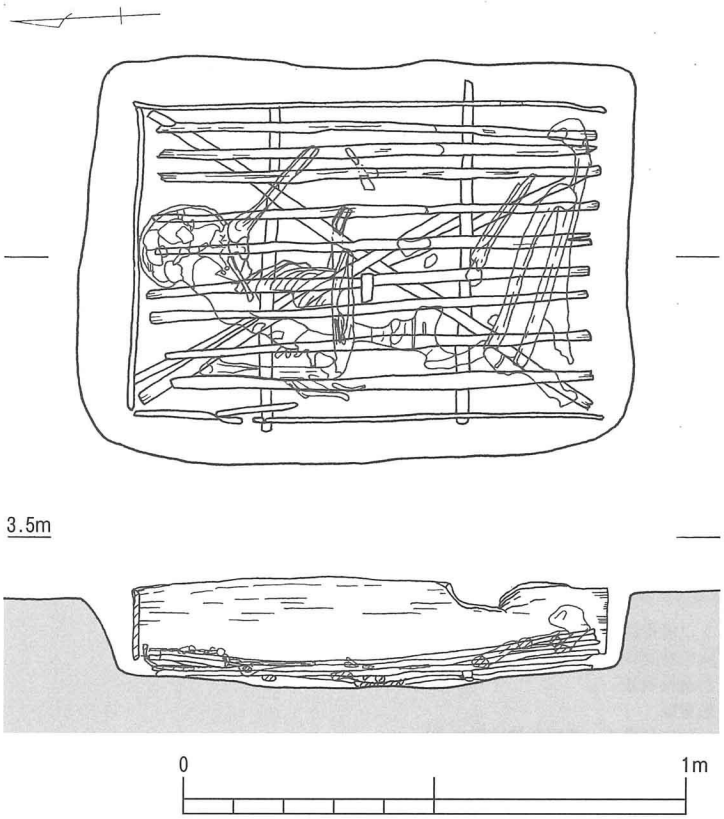


図10　東区１号墓底部竹組実測図（１：15）

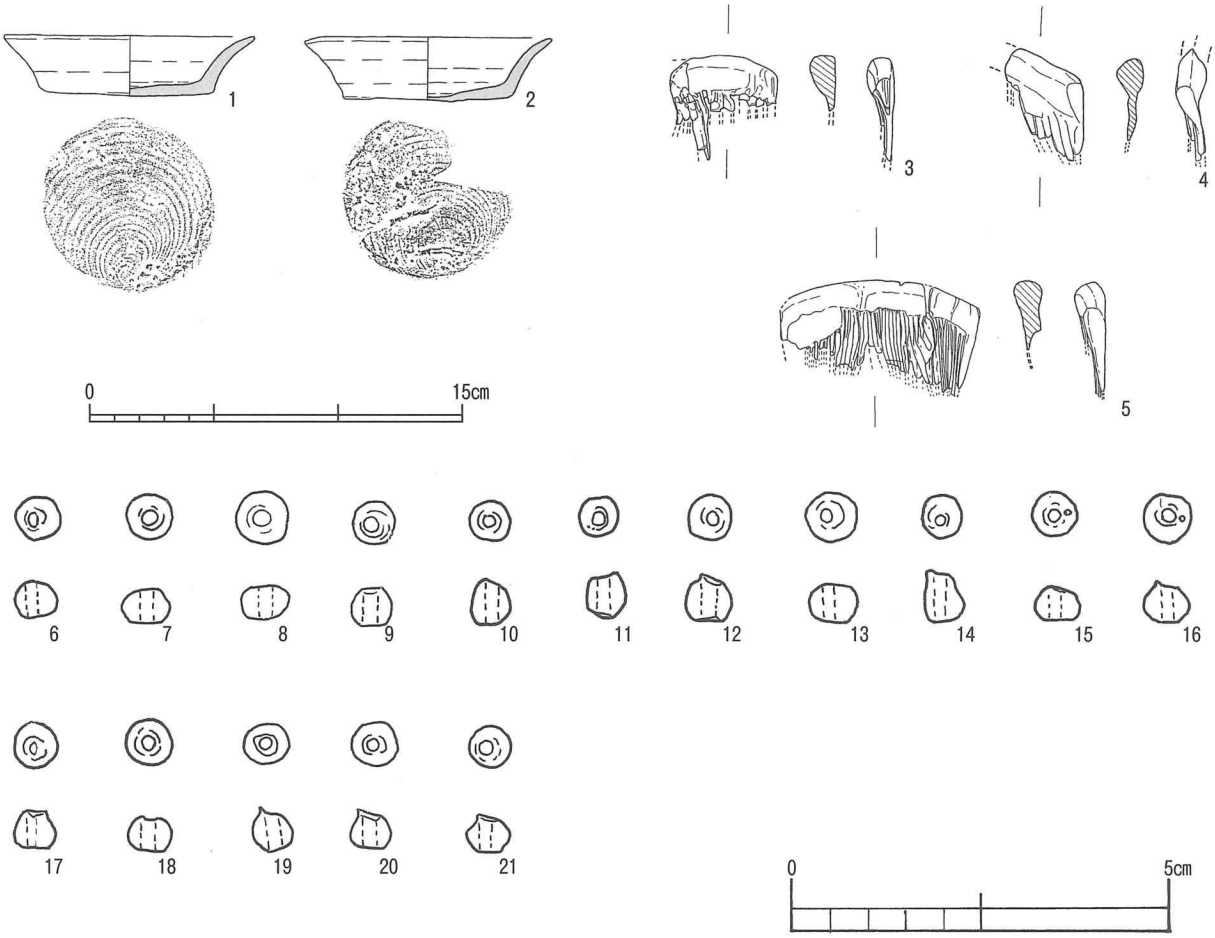


図11　東区１号墓副葬品実測図（１～５＝１：３，６～21＝１：１）

１号墓の副葬品は、土師質土器皿２点、櫛３点、数珠玉16点である（図11、図版６－１～６）。

図11－１の土師質土器皿は、口径10.2cm、器高2.5cm、図11－２は、口径9.9cm、器高2.6cmである。底部から口縁部にかけてゆるく外反している。底部は糸切である。２点とも鈍い橙色（5YR7/4）である。伊藤智による分類（宮澤ほか2007、84～85頁）で「Ａ－２類」にあたり、16世紀末から17世紀後半の年代と考えられている。

櫛３点（図11－３～５）のうち２点は破片である。５は長さ7.6cm、幅4.4cmあり、35本ほどの歯数である。樹種はユズリハ属である（第４章第２節参照）。

数珠玉は、すべてガラス製である。直径５～６㎜で、糸通しの孔があいている（48頁、付表１）。

１号墓の人骨は、壮年から熟年の女性骨と推定され、頭蓋骨の内部には脳組織が残存していた（第４章第１節参照）。

２号墓（図12～15、図版３・６）

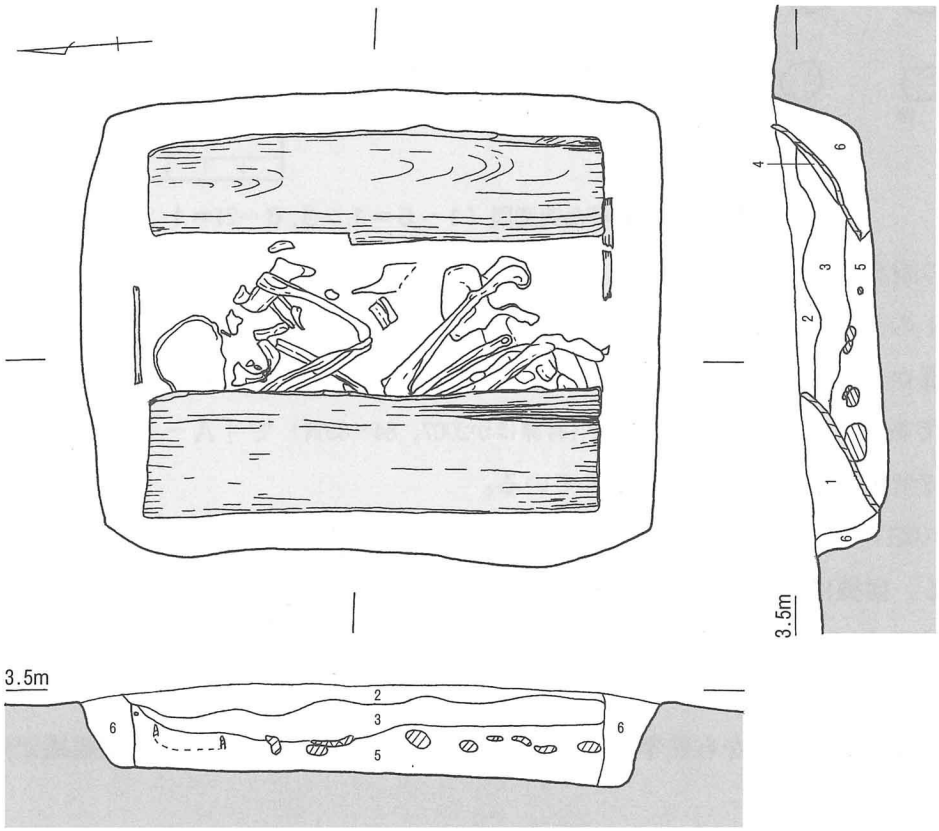
２号墓は１号墓の東南にあり、１号墓とほぼ方位をそろえている。

長方形の掘形は、長辺1.13m、短辺0.90m、深さ20cmあり、１号墓のそれよりはやや大型である。長辺にはマツの板材２枚が斜めに倒れた状態でみつかったが、短辺の材はほとんど腐朽していた(図12、図版３－１・２)。棺は長辺0.92m、短辺0.53mの規模である。底には板材はなく、竹組の施設があった。短辺と平行に６本の竹材を並べ、さらにその下には対角線に×形に竹を組んでいる。南西－北東方向は竹を２本束ねる（図14、図版３－３)。

人骨は、頭部を北に向けるが、１号墓とは逆に顔面を西に向けている。１号墓同様、四肢を強く曲げて埋葬されていた（図13、図版３－１)。

副葬品は、頭蓋骨の上と頭部の後方から土師質土器の皿が３点、頸部から胸部にかけて数珠玉が46点、人骨の背面側（東側）から折敷１点が出土した。土師質土器皿は、２点が伏せた状態でみつかった（図13、図版３－２)。

出土人骨は、壮年から熟年の男性骨と推定されている（第４章第１節参照)。



1．灰色粘質土（細砂混じる）
2．灰褐色粘質砂
3．青灰色粘質土（黄褐色細砂混じる）
4．暗灰色粘質土
5．暗オリーブ粘質土
6．灰褐色粘質細砂

0　1m

図12　東区２号墓実測図（１：15)

土師質土器の皿３点（図15、図版６－７～９）は、微妙に形が違う。図15－１は口径9. 5cm、器高2.0cm、底径6.4cm。３点の中ではいちばん小ぶりである。体部はわずかに外反する。内外面とも灰白色（2.5Y2/1～8/1）である。

２は、口径9.5cm、器高2.2cm、底径7.0cm。１より底径が大きい。体部はゆるく外反する。内面が灰白色（10YR8/2）で、外面は鈍い黄橙色（10YR7/2）である。

後頭部に接して出土した３は、口径9.6cm、器高2.8cm、底径7.0cm。３点の中でもっとも器高が大きく、体部は強く外反する。内面は鈍い橙色（5YR6/3）、外面は鈍い橙色（7.5YR7/3）ないし黒褐色（7.5YR3/1）である。

２号墓の土師質土器皿も、伊藤分類のＡ－２類である。

櫛は1/2程度の断片である。歯はほとんど残っていない。樹種はツバキ科ヒサカキ属である（第４章第２節参照）。

折敷（図15－５、図版６－11）は、一辺28.5cmの方形（ないし長方形）の曲物だったと推定されるが、一部しか残っていない。側板は角に３条ほどの切込みを入れて折り曲げられている。

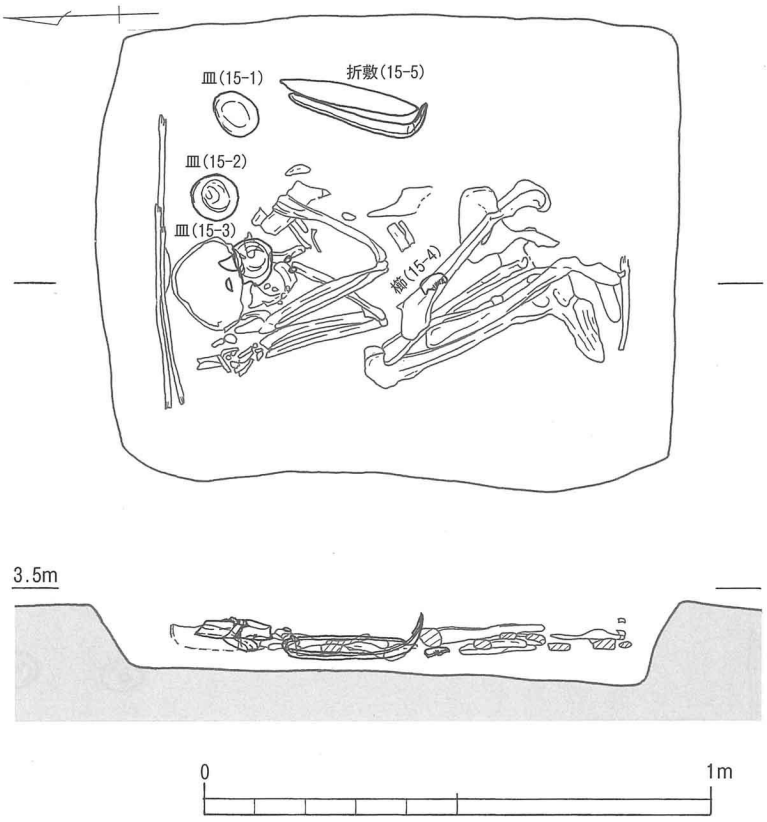


図13　東区２号墓副葬品出土状況図（１：15）

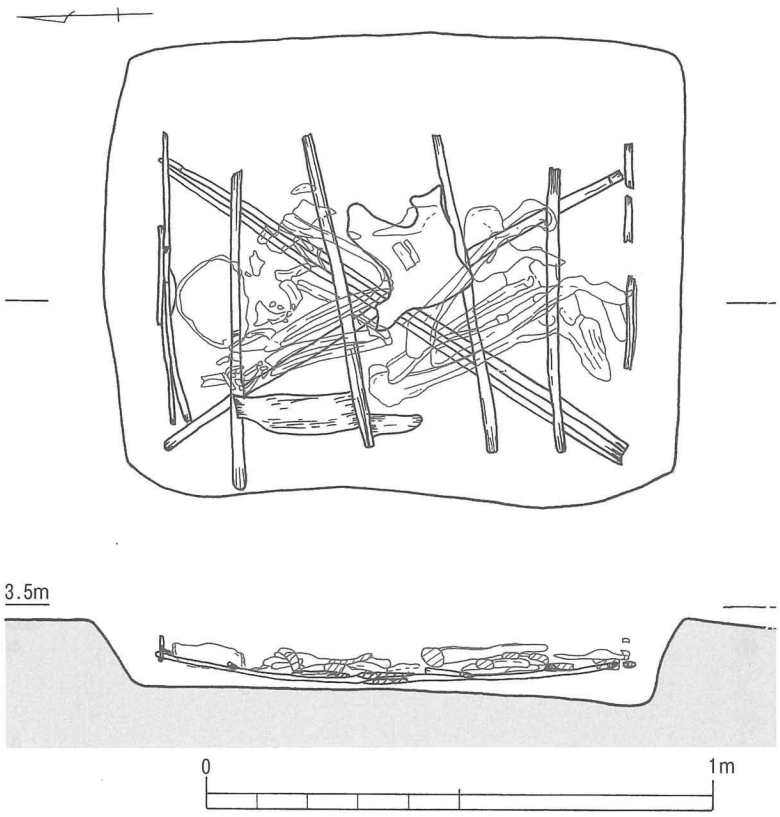


図14　東区２号墓底部竹組実測図（１：15）

側板と底板とは樹皮などで緊縛してあったのだろうが、脱落している。また、綴付けの孔が何箇所にもあるので、補修を繰り返したのであろう。また、底板の外面に刃物の切り傷が多数残っているので、俎板に転用されたこともあったと考えられる。底板は、ヤナギ科ハコヤナギ属、側板はマツ属である（第４章第２節参照）。

数珠玉はいずれも木製（広葉樹）、扁平な玉である（図15－６～51、付表２、図版６－12）。直径４～６㎜、厚さ２㎜前後がほとんどだが、図15－22は直径９㎜、厚さ３㎜と大きい。

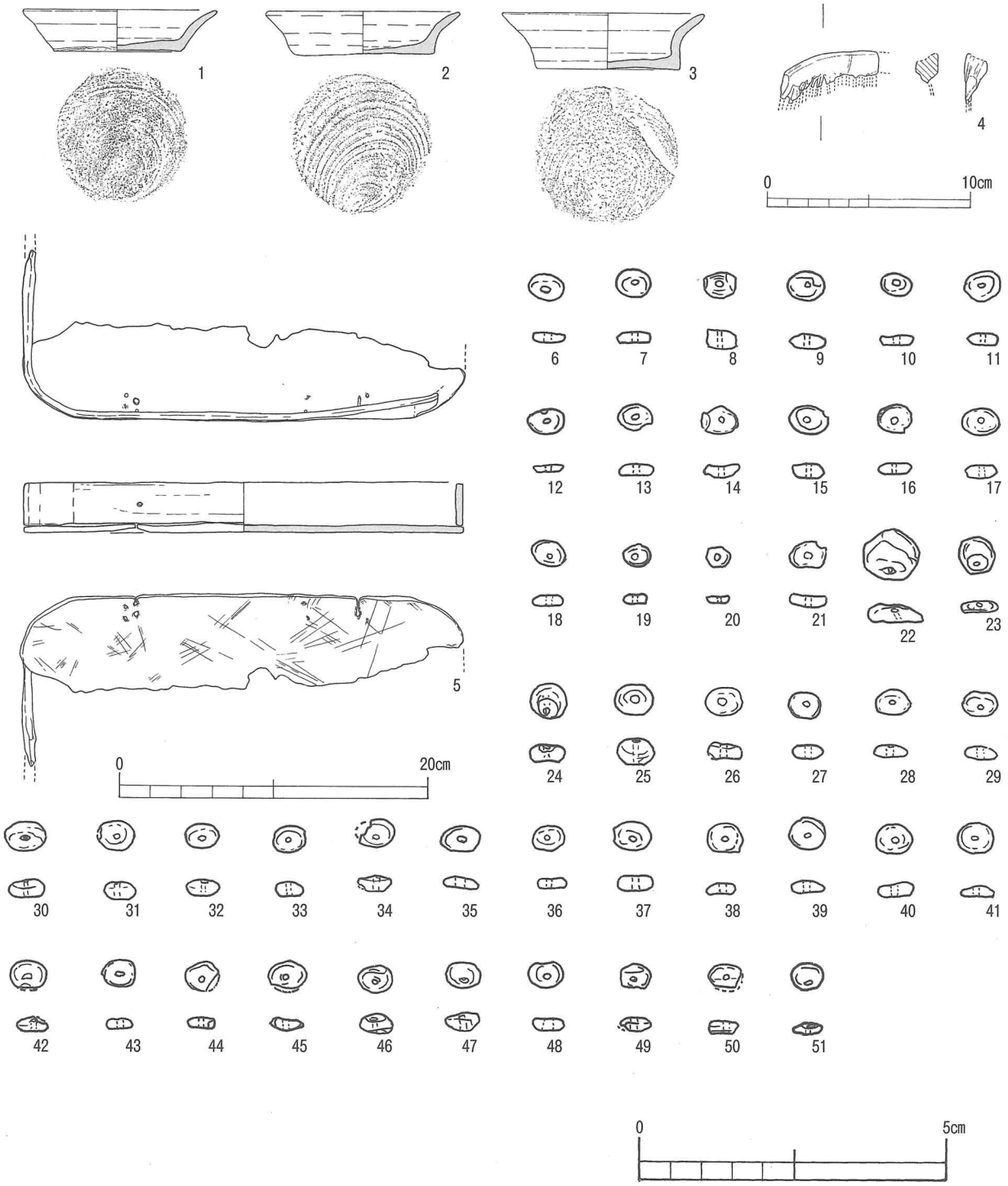


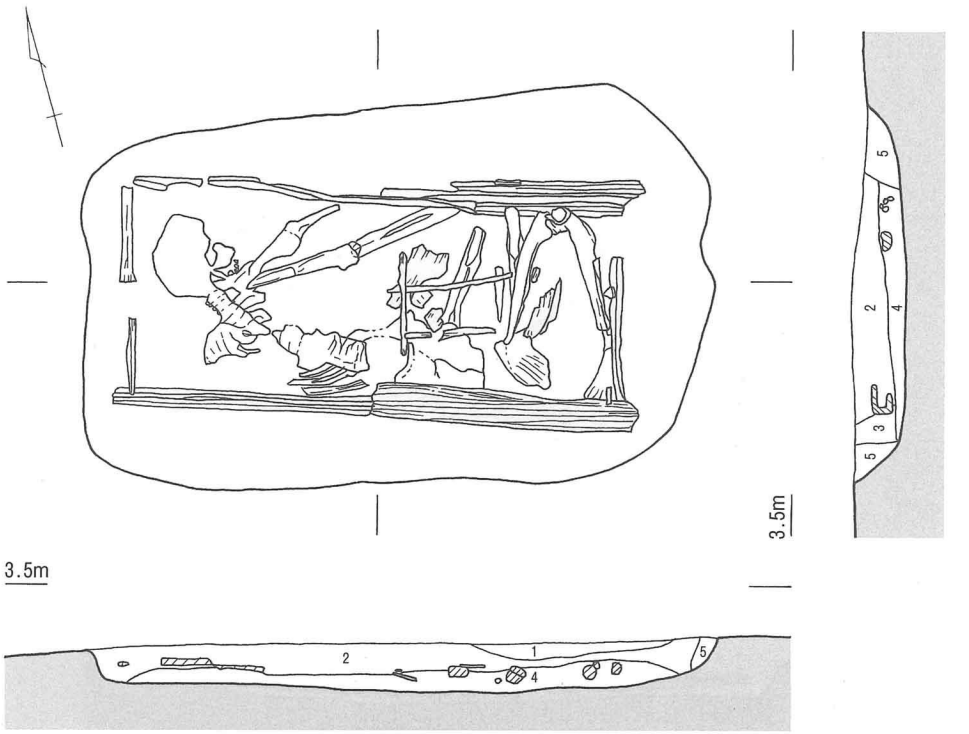
図15　東区２号墓副葬品実測図（１～４＝１：３、５＝１：４、６～51＝１：１）

３号墓（図16～19、図版４・７）

１号墓の南、２号墓の西、それぞれ約２ｍを隔てた位置にある。１・２号墓と違い、長辺を東西に向けており、被葬者も頭部を西に、顔面を北に向けた状態で埋葬されていた。

掘形は長辺1．20m、短辺0．73mの長方形で、深さは15cmであった。棺は１・２号墓より狭長で、1.03m×0.47mの規模である。ただし、棺は板材を組むものではなかったようで、各辺には竹材が残っていた。特に、南辺には竹材が簾状に折り重なって残っていたので、四辺を竹の簾で囲んだ棺だったらしい。底は２号墓と同じく、短辺に平行に竹材を７本並べ、その下に×形の支えを入れた構造である（図18、図版４－３）。棺内から出土した木片にオニグルミ材がある（第４章第２節）が、蓋の一部とも思えない。

副葬品は、棺内の人骨上から土師質土器皿が２点と火切臼１点、北辺の内側から櫛１点が出土したほか、棺外南側からも土師質土器皿１点が出土した（図17、図版４－１）。



1．灰色粘質土（細砂混じる）
2．灰褐色粘質砂
3．暗灰褐色粘質砂
4．暗オリーブ灰色粘質土（黄褐色細砂混じる）
5．灰褐色粘質細砂

0　1m

図16　東区３号墓実測図（１：15）

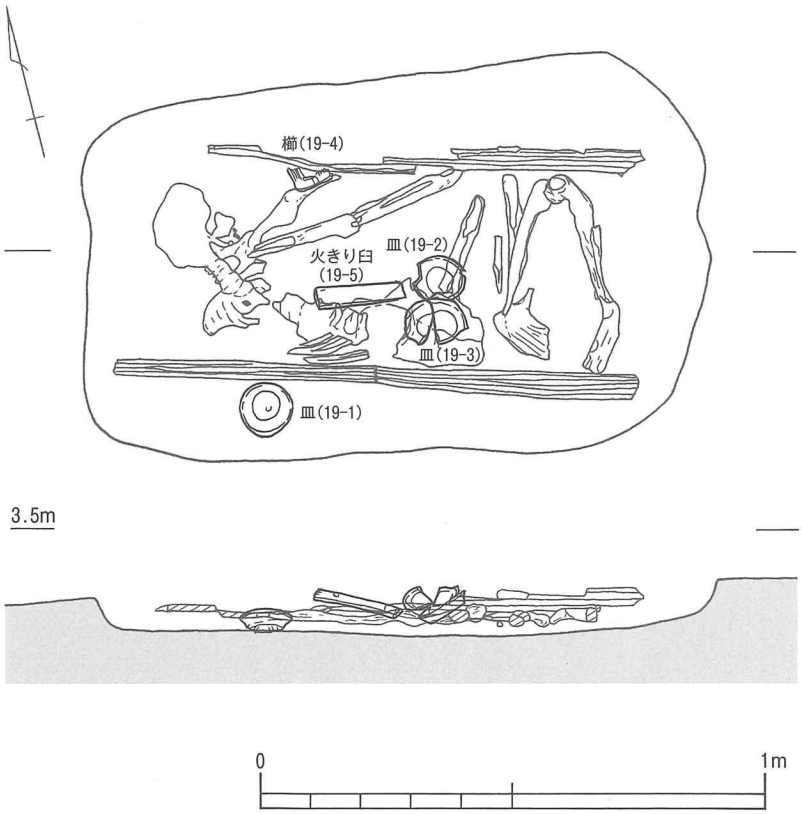


図17　東区３号墓副葬品出土状態図（１：15）

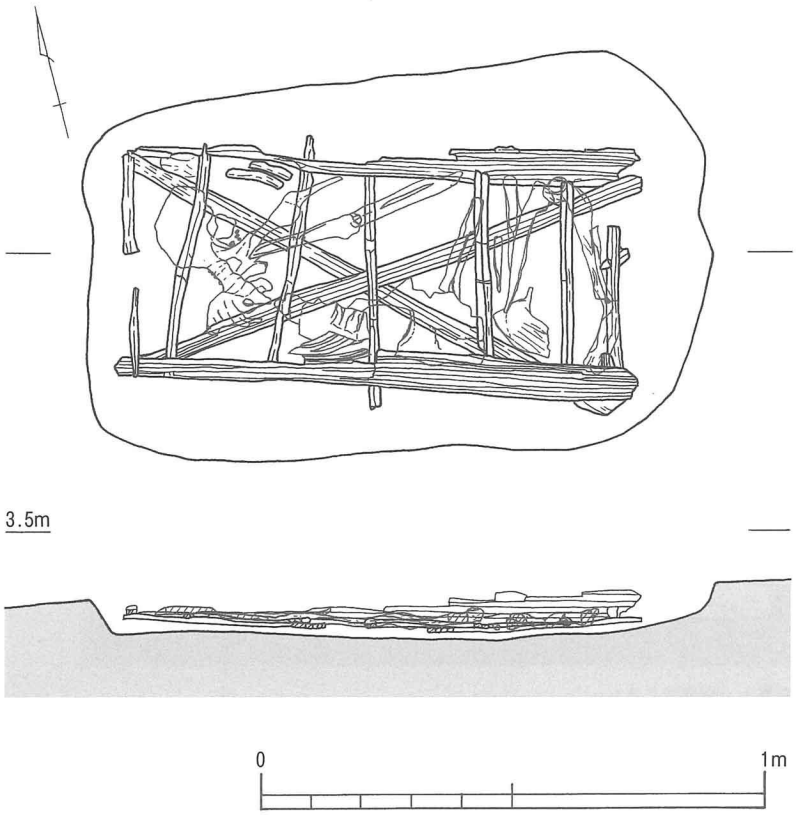


図18　東区３号墓底部竹組実測図（１：15）

３号墓の副葬品は、土師質土器の皿が３点、櫛１点、火切臼１点である（図19、図版７）。

図19－１は棺外から出土した（図版７－１）。うすい体部は、ゆるく外反する。口径9.7cm、底径6.2cm、器高2.4cm。外面は灰白色（2.5YR7/1）、内面は灰白色（10YR8/1）ないし灰黄褐色（10YR6/2）。

２は、やや深い器形で、体部は直線的にひろがる。口径10.5cm、底径7.0cm、器高3.0cm。外面は鈍い黄橙色（10YR7/2）ないし黒褐色（10YR3/1）、内面は鈍い橙色（7.5YR6/4）である。

３は、１に似るが体部がゆるく外反してひろがる。口径10.2cm、底径6.4cm、器高2.5cm。内外面とも灰白色（10YR8/2～10YR8/1）。

櫛（図15－４、図版７－４）は現存長7.7cm、現存幅4.2cmあるが、22～23本あった歯はほとんどが欠損している。樹種はツバキ科ヒサカキ属である（第４章第２節参照）。

火切臼（図15－５、図版７－５）は、長方形のスギ板材で、長辺の１ヶ所に擦りきりの穴があいている。穴の内面は黒く焦げているので火切臼と判断した。長さ17.5cm、最大幅４cm、厚さ1.3cmである。

出土人骨は、壮年から熟年の女性骨と推定された（第４章第１節参照）。

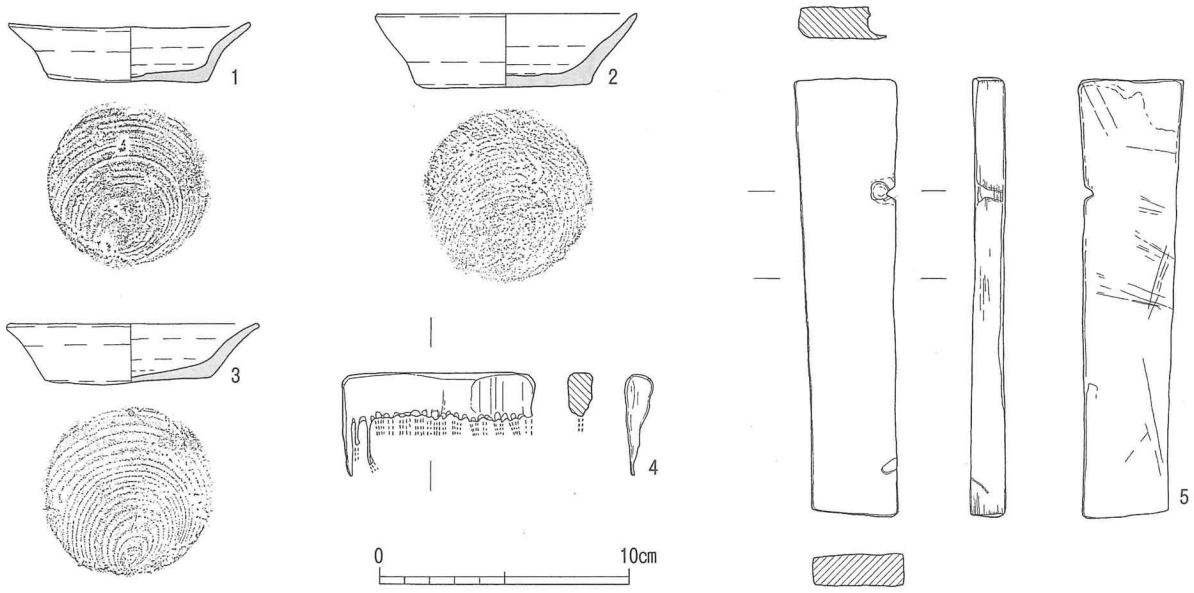


図19　東区３号墓副葬品実測図（１：３）

(2) 溝ほか（図20・21、図版４－４）

３基の木棺墓の南側に、４条の東西溝がある。いずれも素掘りである。

ＳＤ01は、溝幅0.6～0.8m、深さ10cmの浅い溝。埋土は灰褐色粘質土。出土遺物はない。

ＳＤ02は、ＳＤ01の南にあり、調査区の東壁に続かない。溝幅は最大1.5m、深さ20cmで掘り直しがある。黄褐色ないし褐灰色の粘質土に砂をはさんでいる。出土遺物はない。

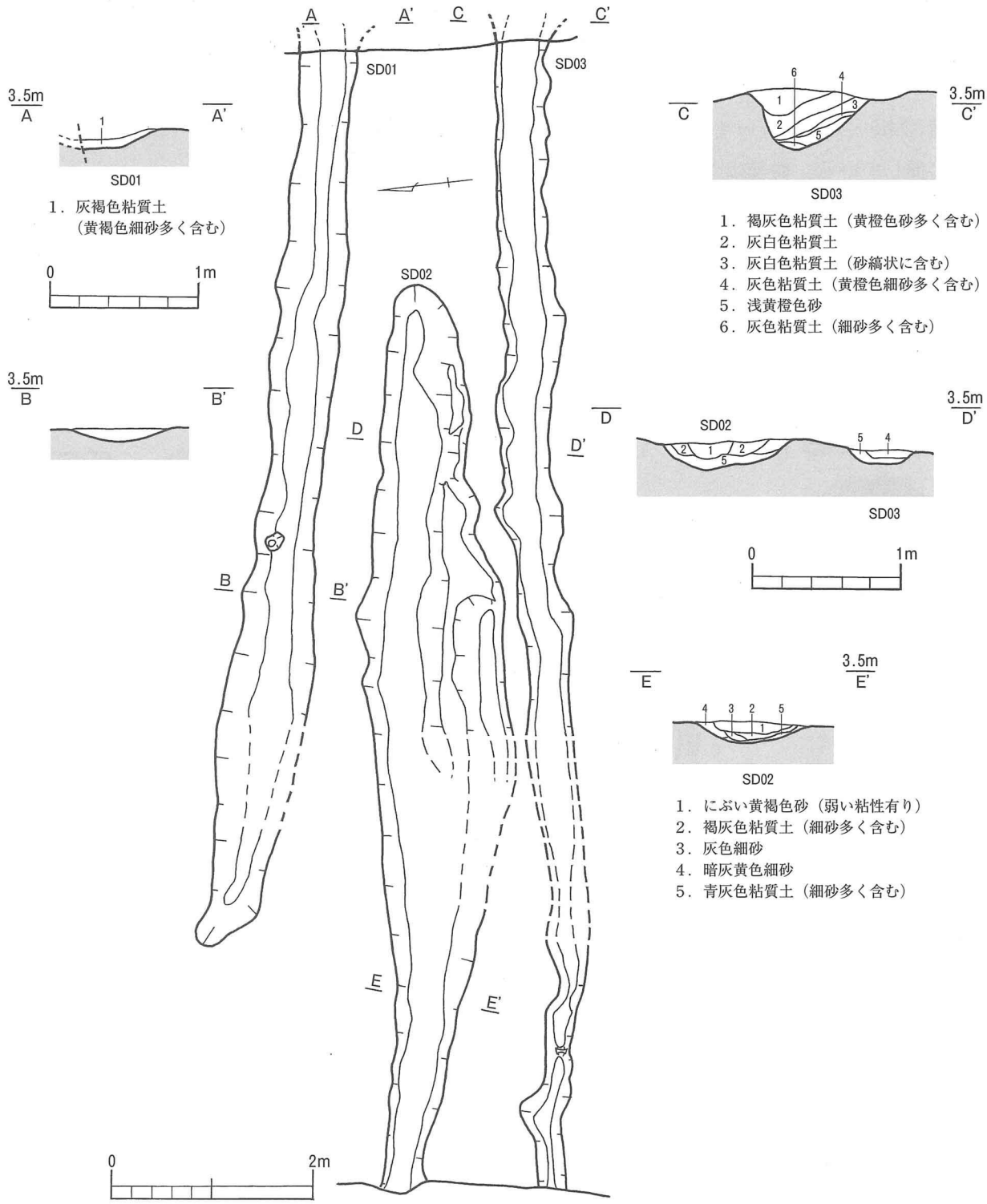


図20　東西溝ＳＤ01～03実測図（平面＝１：60，断面＝１：40）

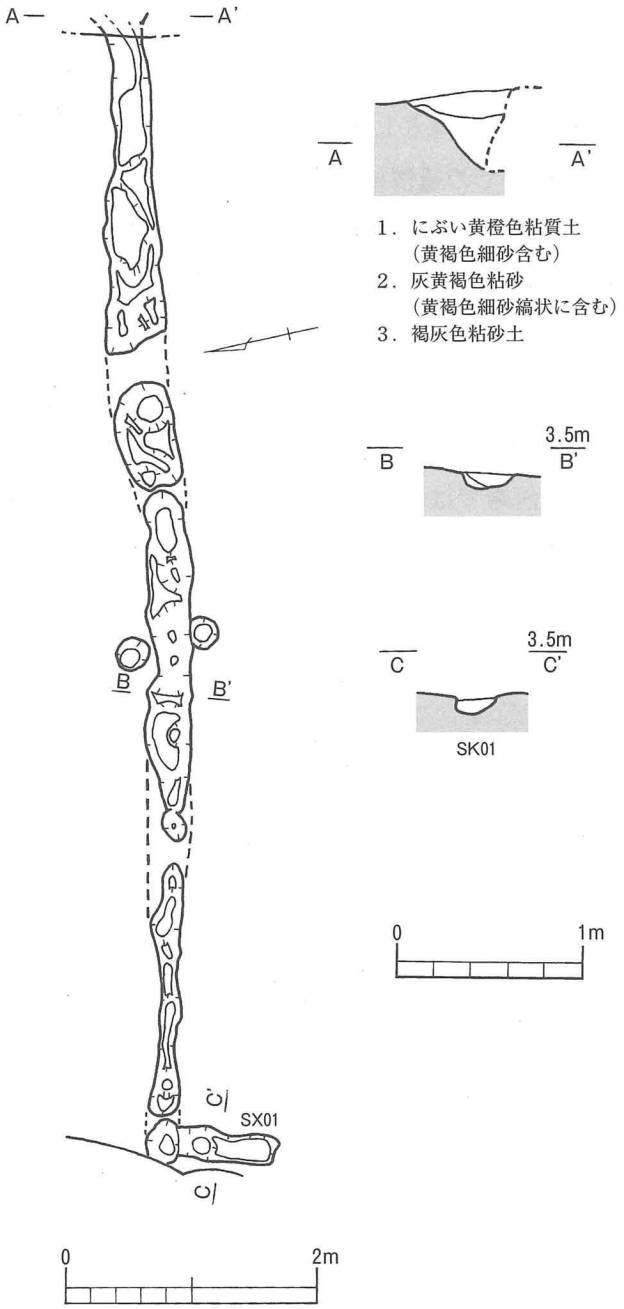


図21　東西溝ＳＤ04，土坑ＳＫ01実測図（平面＝１:60，断面＝１:40）

ＳＤ03は、ＳＤ02の南にある。調査区東壁では、溝幅0.75m、深さ40cm。

ＳＤ04は、東壁では、溝幅0.6m以上、深さ40cmある。溝底の凹凸が著しい。ＳＤ03・04とも出土遺物はない。

これらの東西溝の位置は、最近までの水田畦にほぼ一致しているので、水田区画に関連するのであろう。

このほか、溝に近接していくつかのピット（小穴）があった（図22）。

(3) 包含層出土遺物（図23、図版７－６）

１は弥生時代か古墳時代の甕または壺の胴部片。２は唐津灰釉陶器の皿の口縁部。16世紀末から17世紀初めの製品である。３は備前焼甕の胴部片。４は肥前系陶器皿の口縁部片。復元口径は12.5cm。体部外面に重ね焼きの痕跡がある。

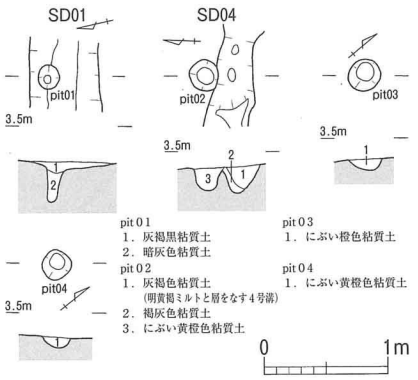


図22　Pit01～04実測図（１：60）

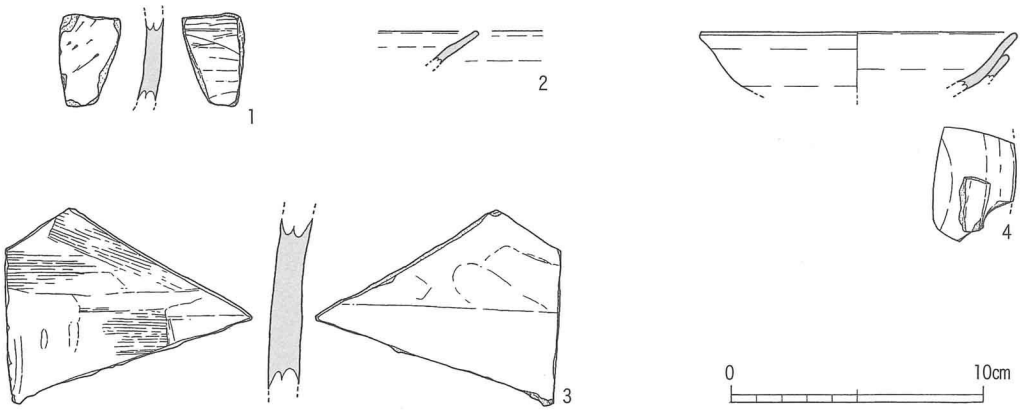
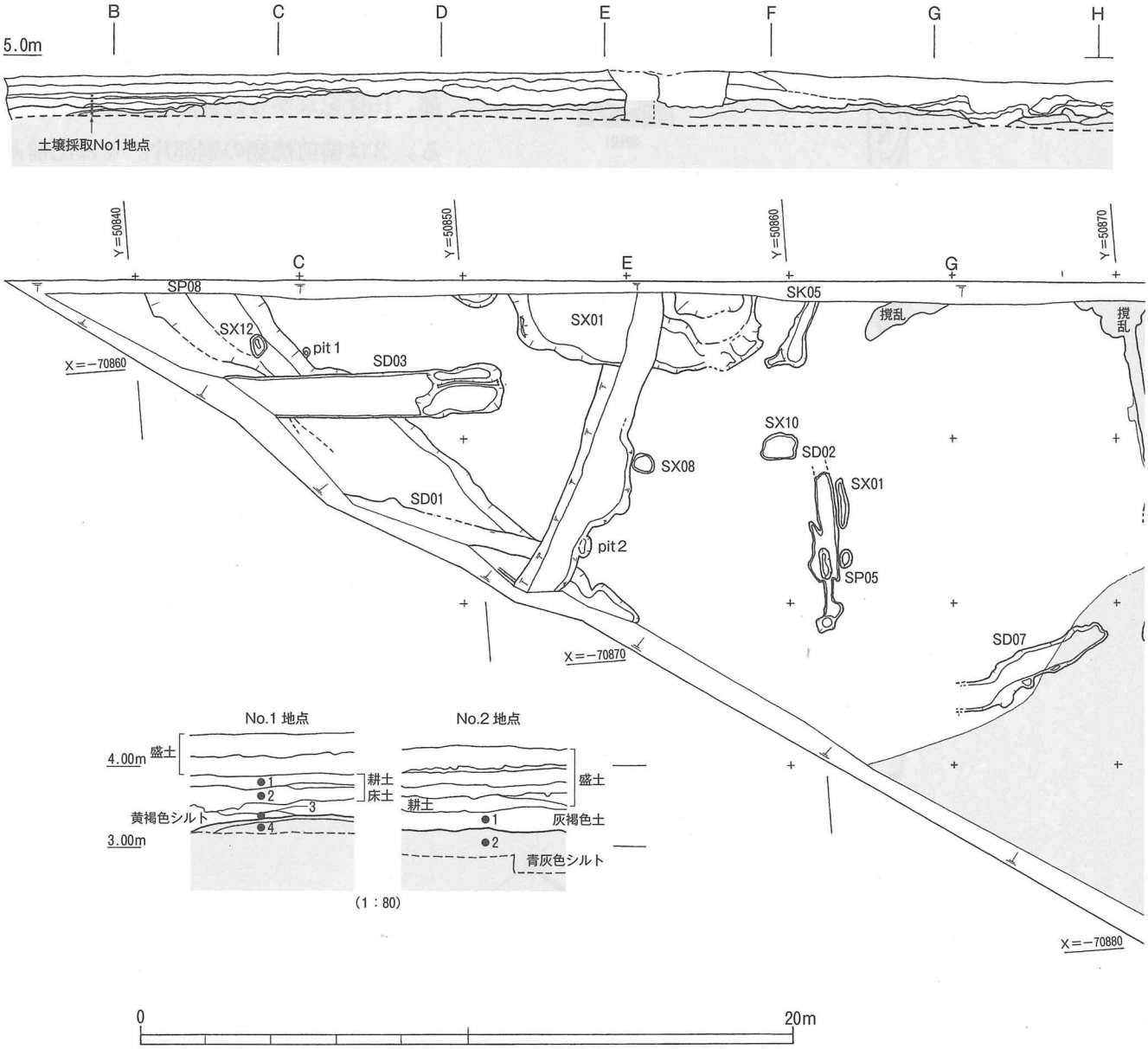


図23　東区出土遺物（１：３）

第３節　西区の遺構と遺物（図24～30、図版５・７）

西区も以前は水田地であったが、調査着手時には工事用地として盛土がなされていた。調査区の一部（西区の約1/3）はすでに攪乱を受け、この部分での遺構検出はおこなえなかった。

西区の層序は、現地表から60～70cmは盛土、その下に旧水田耕土層（灰褐色粘質土層）がある。西区の中央部あたりから東（およそＩライン以東）では、旧耕土層の下層には灰色ないし黄褐色の床土層があり、一部では両者の間に砂層がはさまれている。床土層の下は青灰色シルト層や、粘土と砂の互層が堆積している。これらが基盤層（地山）である。西区の西部（およそＩライン以西）では床土層がなく、耕土と青灰色シルト層の間に粘土と砂の互層が堆積する。Ｅライン以西では、青灰色シルト層が深くなる。西区の西端では、南東－北西方向で、東から西へ下がる大きな溝の肩を確認した（ＳＤ01）。旧神戸川の流路を反映したものであろう。



(1) 遺構と遺構出土遺物（図26～29、図版５）

西区の遺構は希薄であった。まず、遺物を出土しなかった遺構をまとめて記述しておく。

西区の東部（Ｌライン付近）にある土坑ＳＫ09は、東西1.8m・南北１ｍほどの不整形な土坑である。その南にある東西溝ＳＤ06は、幅１ｍ余りを確認したが、本来の幅は確認できなかった。西区の中央部北辺（Ｈ～Ｉライン間）には、蛇行する２条の素掘溝ＳＤ04・05がある（図版５－４）。砂と粘土の互層を埋土とし、溝底は凹凸が著しい。自然の流路であろう。ＳＤ04・05の周囲には、不整形や溝状の土坑ＳＫ02・03やＳＸ06・07がある。西部のＦライン付近には、北から土坑ＳＫ05、ＳＸ09・10、南北溝ＳＤ02、溝状の土坑ＳＫ01が並んでいる。いずれも砂質土を埋土とする浅い遺構。その５ｍ西には、楕円形のＳＸ08とPit２があるが、性格不明である。

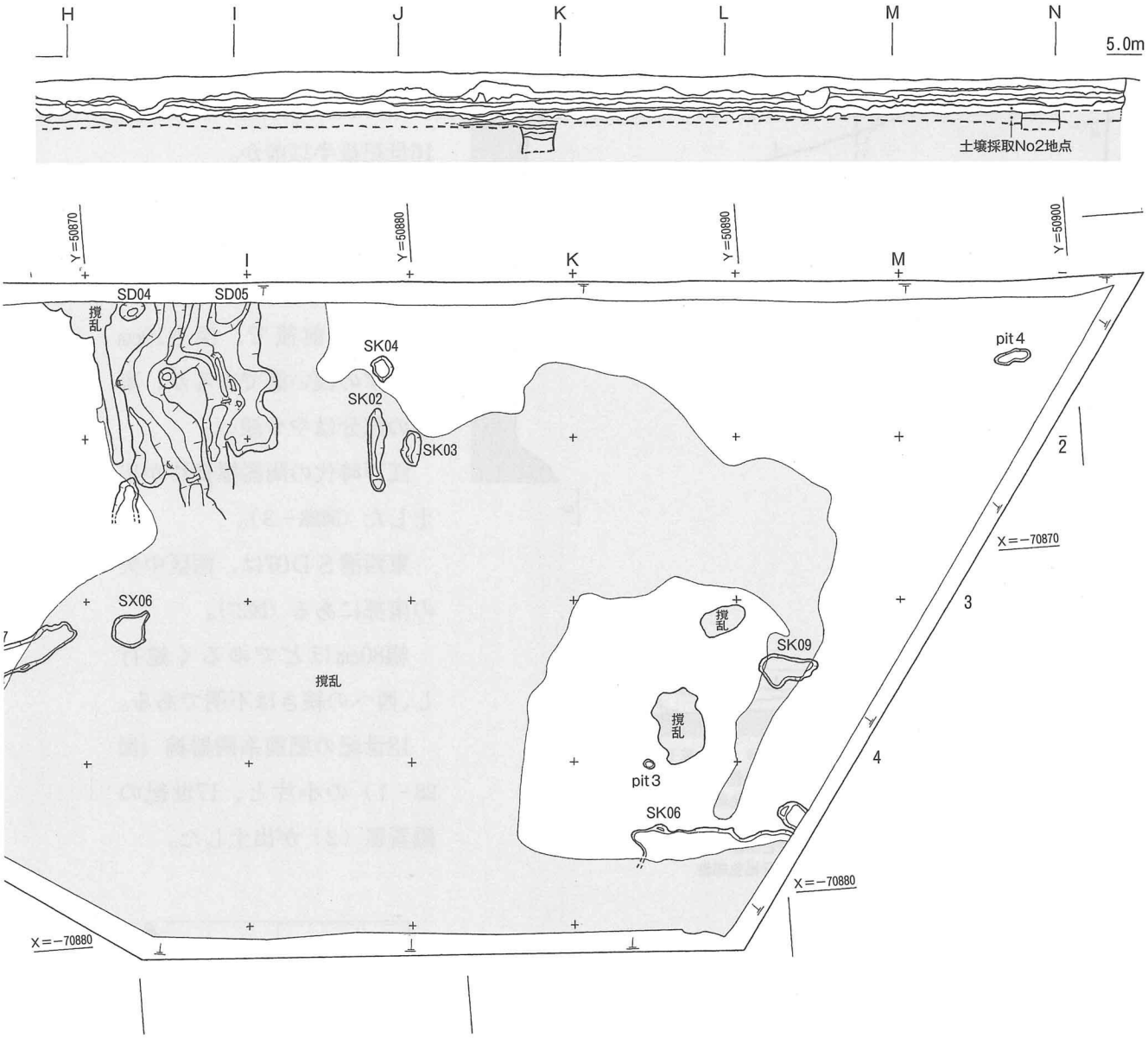


図24　西区遺構図（１：200）

ＳＸ01は、西区の西部（Ｄ～Ｆライン間）の北辺にある不整形な落ち込みである（図25、図版５－２）。

東西は7.5mの規模だが、南北は３ｍ分を確認したにとどまる。深さ20～30cm。

埋土は、黄褐色ないし明黄褐色などの細かい砂である。蛇行する流路の一部なのかもしれない。

上層部から、中世土師質土器の杯の破片が３点出土し、うち１点を図化した（図26）。16世紀後半以前か。

東西溝ＳＤ03は、西区の西端に近いところにある（図27、図版５－３）。

幅1.2m前後で、深さ10cm足らずの浅い溝であるが、東端の部分はやや深い。

江戸時代の陶器擂鉢片が出土した（図28－３）。

東西溝ＳＤ07は、西区中央の南部にある（図27）。

幅80cmほどでゆるく蛇行し、西への続きは不明である。

18世紀の肥前系陶器椀（図28－１）の小片と、17世紀の磁器皿（２）が出土した。

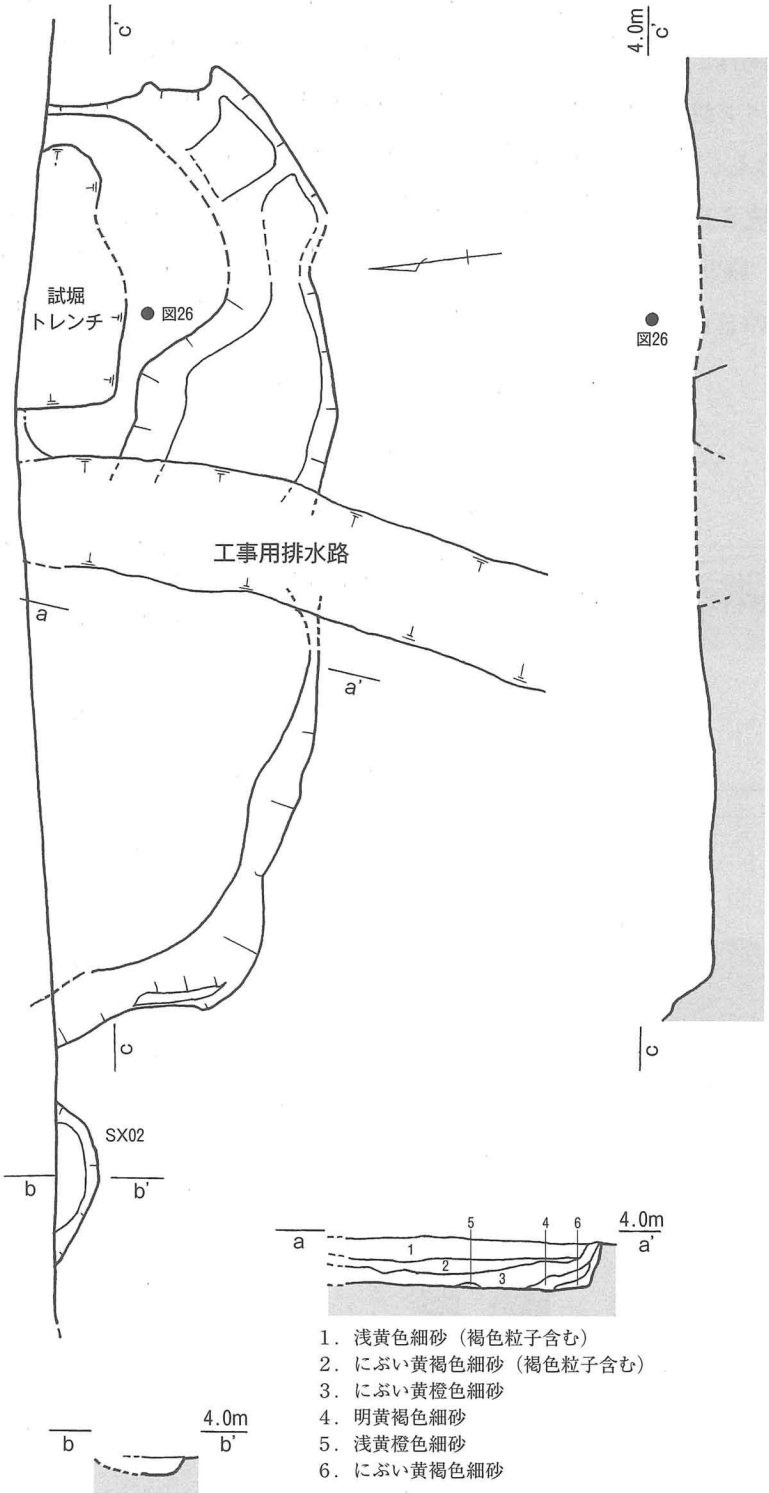


図25　ＳＸ01・02実測図（１：60）

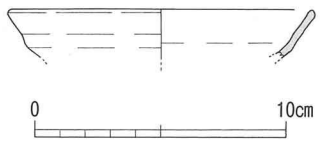


図26　ＳＸ01出土遺物（１：３）

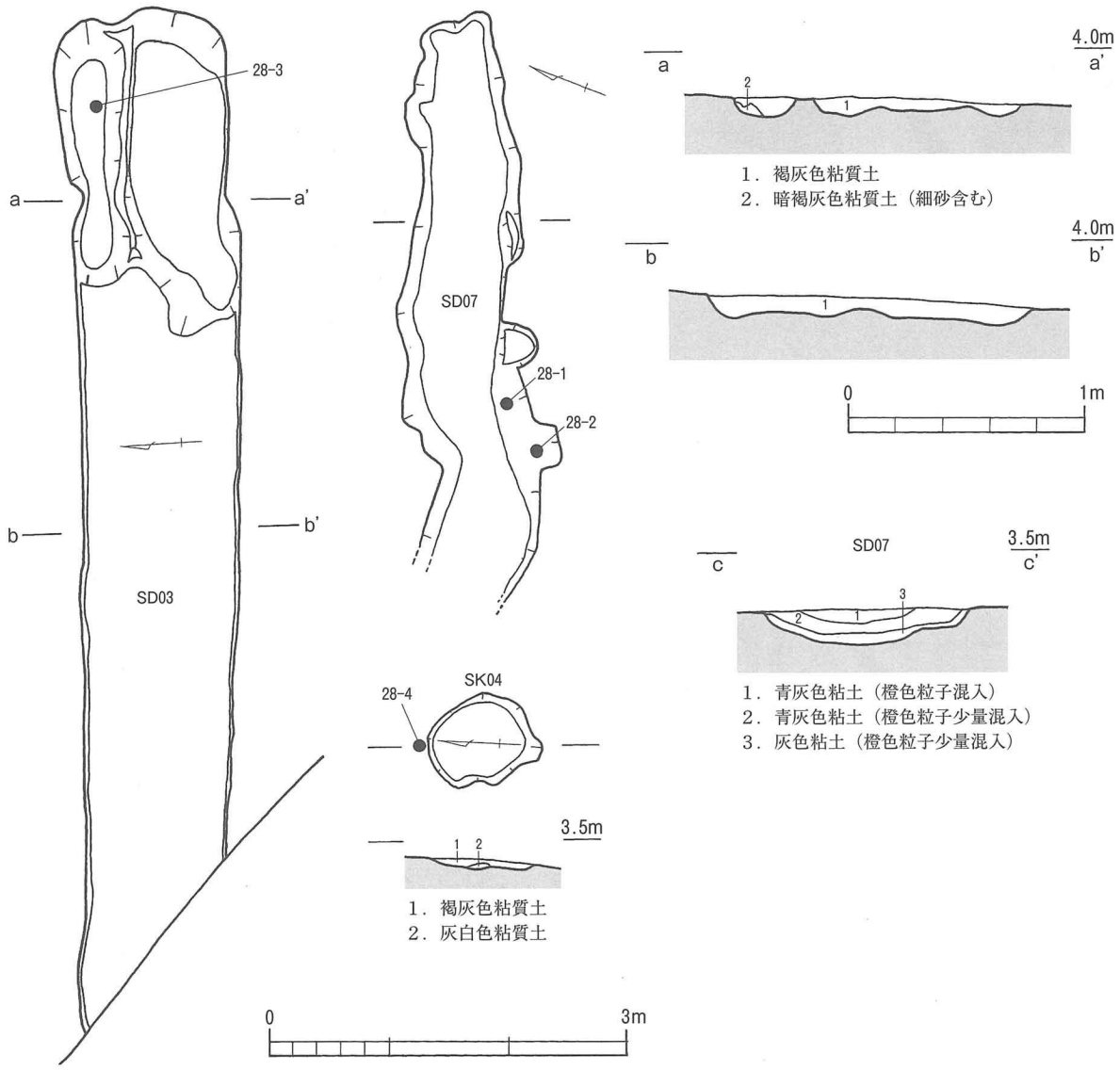


図27　東西溝ＳＤ03・07，土坑ＳＫ04実測図（１：60，溝断面１：30）

土坑ＳＫ04は、ＳＤ04の東側にある小さな穴（図27）。土坑の肩の部分から、江戸時代の陶器大皿と思われる小破片（図28－４）が出土した。

(2) 包含層出土遺物（図29、図版７－９・10）

１（図29）は、縄文土器。粗製深鉢の破片。内外面とも条痕。４Ｍ区出土。

２は備前系擂鉢である。内面に６条の擂目がある。口径26.5cm。赤褐色(2.5YR5/3)。室町時代前半。２Ｈ区。

３は蓮弁文のある青磁椀。中国製。明緑灰色（10GY8/1）室町時代前半。

４は陶器小皿の小片。２Ｍ区。

５は中国製白磁の壺片か。平安時代末のものであろう。１Ｇ区。

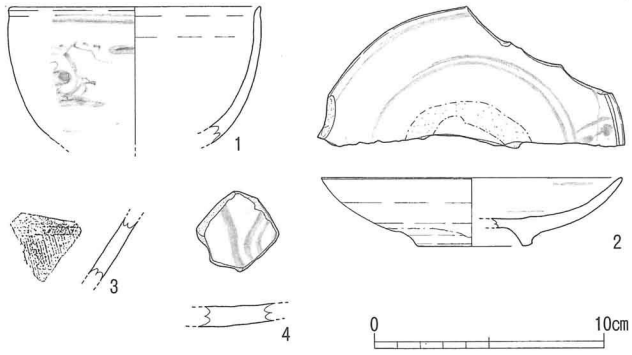


図28　ＳＤ03・07，ＳＫ04出土遺物（１：３）

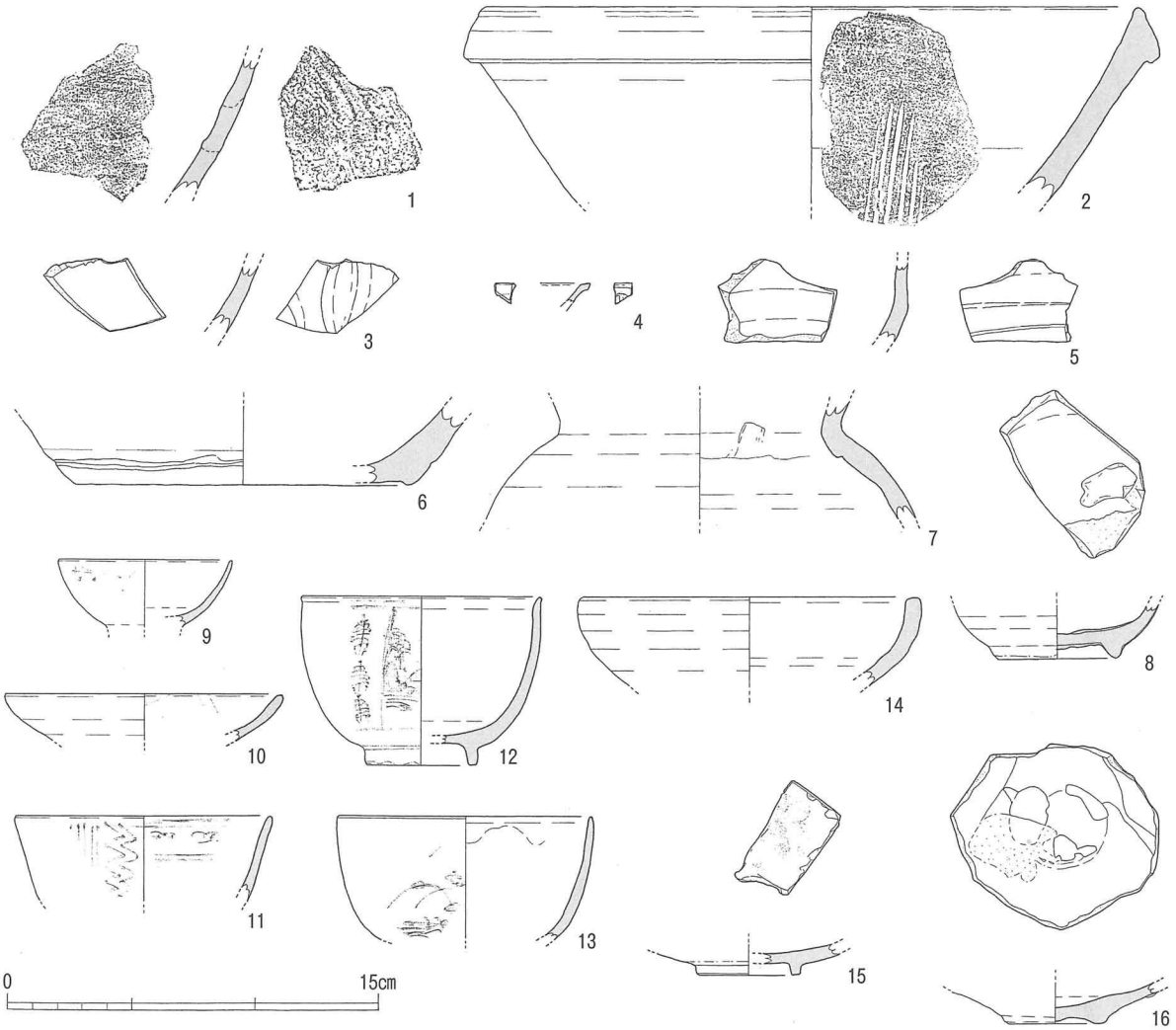


図29　西区包含層出土土器（1：3）

6は備前系擂鉢の底部。底径13.7cm。室町時代前半。1Ｉ区出土。

7は陶器壺または甕。江戸時代中頃。1Ｈ区出土。

8は陶器椀の底部。外面灰白色（2.5GY8/1）。

9は肥前系磁器の小杯。外面に染付がある。口径7cm。外面は明緑灰色（10GY8/1）。1Ｈ区。

10は肥前系磁器の小皿。口径11.2cm。内面に染付の施文がある。2Ｆ区出土。8～10は江戸時代（17世紀）。

11～13は肥前系磁器の椀である。11は内外面に染付の文様がある。口径10.4cm。2Ｇ区出土。12は外面に染付で「寿」と花文を描く。口径9.7cm、器高6.9cm。3Ｈ区。13は外面に染付の文様がある。口径10.3cm。1Ｄ区。11～13は江戸時代（18世紀）。

14は備前系平鉢。口径13.8cm。暗赤褐色（2.5YR3/4）。3Ｌ区出土。江戸時代（17世紀前半）。

15は京焼系の色絵陶器の皿か。見こみに緑や青系の花文がある。外面は灰白色（5Y7/1）。1Ｄ区出土。江戸時代（18世紀中頃）。

16は肥前（唐津）系の陶器の皿底部。見こみに3ヶ所の砂目がある。にぶい黄褐色（10YR7/4）。3Ｇ区出土。江戸時代（17世紀）。

第４章　自然科学的調査の成果

第１節　出雲市余小路遺跡から検出された人骨について

鳥取大学医学部機能形態統御学講座形態解析学分野
井上貴央、江田真毅
鳥取大学医学部技術部
足立昭子

１．はじめに

平成18年（2006）８月18日に、出雲市余小路遺跡から人骨発見との報を受け、８月25日現地におもむいた。３基の木棺墓からそれぞれ１体の人骨が検出されており、１号墓の人骨の頭蓋骨からは脳の一部が検出された。

この遺跡の時期は、土師質土器から17世紀中以降と考えられたが、16世紀末までさかのぼる可能性があるとのことである。脳の一部が残っていたにもかかわらず、骨の保存状況は不良で、検出時や取り上げ時に細片化をきたしたものが多く、骨から得られる情報は極めて少なかった。取り上げた骨は、その後鳥取大学医学部に運び、クリーニングを行い、一部の骨については保存処理を行った。また、脳と頭蓋骨の一部は氷温庫の中に入れて保存していたが、出雲市から平成18年～19年にかけて「出雲市から出土した江戸時代の脳に関する保存科学的研究」として受託研究を受けて脳と脳が含まれていた頭蓋骨の保存処理を行い、平成18年３月には中間報告書を、平成19年12月には最終報告書を提出した。

本稿では、人骨および脳から得られた所見について概説する。

２．検出人骨について

１）１号墓の人骨

木棺の長軸方向は北～南である。木棺の北側には頭蓋骨が、西側には脊椎～骨盤にかけての残存骨が認められた。全体としては横臥位をとっており、顔面は東を向いている。

右上肢の上腕はほぼ体軸に沿い、肘関節は90度屈曲している。左上肢は体軸から約45度の角度でもって肩関節が屈曲しており、肘関節は右と同様に90度屈曲しているようである。左右の股関節は約90度屈曲しており、膝関節は140度を超える程度に極めて強く屈曲していたようである。

頭蓋骨では右側頭骨～右頭頂骨にかけての部分、後頭骨～左頭頂骨および左側頭骨にかけての部分が検出されており、後者の部分に脳の遺残物が付着していた。乳様突起は破損があり、その形状の詳細は不明であるが、中等度に発達しているようである。頭蓋骨はそれほど厚くなく全体的に華奢な印象を受ける。

下顎骨は全体的に小さく、女性骨であるとの印象を受ける。右第１、２小臼歯と右第１大臼歯が釘植しているが、その他の歯はいずれも遊離歯として検出されたものである。咬耗はやや進んでおり、Martin分類の１～２度である。上顎中切歯には、強いシャベル傾向が認められる。

C　　I_1	I_1
M_1　P_2　P_1	I_1?

体幹の骨では、椎骨や寛骨の痕跡が認められたものの、風化が著しく、ごく一部の椎骨片以外は取り上げには至らなかった。従って、これらの骨の特徴は明らかではない。

取り上げられた上肢骨では、上腕骨片が確認されたにすぎない。その他に、前腕骨が現地で確認でき、関節の屈曲状況は上述したとおりである。

取り上げられた下肢骨では、左大腿骨片が確認されたにすぎない。脛骨は細片化が著しく、その特徴は不明である。

本人骨は、骨の華奢な印象から判断して女性骨と考えられ、歯の咬耗度から見て、本人骨の年齢は壮年～熟年と推定される。

【脳について】

脳は、頭蓋骨の左半分から発見された。発見当時の写真を図30に示す。骨は脆弱で取り上げ時に断片化して壊れたが、脳と骨をプラスチック容器に移し、密封した状態で氷温庫内にて保存していた。受託研究を受けて脳を保存処理するという方向性が決定され、保存処理を開始した。

今回発見された脳組織は、かなり乾燥収縮が進んでいたが、まだ一部に柔軟性が残っていたので、アセトン乾燥法とビュートバル樹脂含浸法を併用した新しい保存処理法を考案し、保存処理を施すことにした。保存処理の概略は以下の通りである。

1)資料から脳の部分だけを取り出し、慎重に別の容器に移した。

2)脳を容れた容器にアセトンを満たし、アセトンを半月に一回程度交換しながら、数ヶ月かけて水分を完全に除去してアセトン置換を行った。

3)脳の表面に付着しているゴミをピンセットや刷毛を用いて除去し、脳表面をクリーニングし

図30　１号墓の頭蓋骨から発見された脳の検出状況

図31　容器に入れて氷温庫に保存していた頭蓋骨と脳

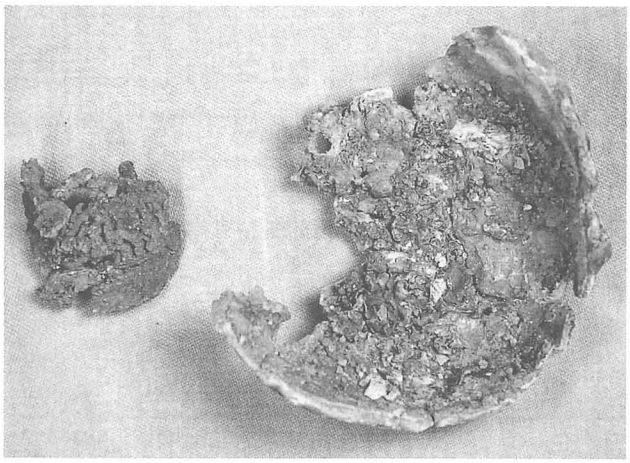


図32　保存処理を終えた頭蓋骨（右）と脳（左）

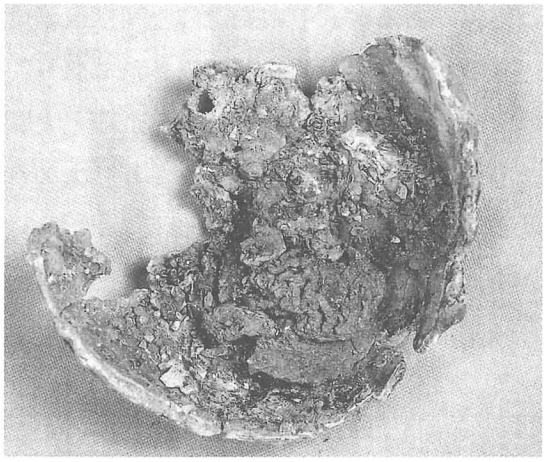


図33　保存処理が完成して、頭蓋骨に収納した脳

た。

4)適切な濃度のビュートバル・アセトン溶液に置換した。液の交換は半月に１回程度行ったが、数ヶ月かけて希薄なビュートバル・アセトン溶液に完全に置換した。

5)数ヶ月かけて自然乾燥を行い、乾燥時における界面張力をできるだけ少なくして、収縮を極力防止するとともに、脳資料の内部が低濃度のビュートバルで置換された状態で乾燥させた。

脳は頭蓋骨から取り出す際に、幾つかのブロックに割れたので、保存処理後にビュートバルを用いて接合した。

脳を容れていた頭蓋骨は常法に従い、自然乾燥させたのち、ビュートバル樹脂を含浸塗布して保存処理を行い、骨を強化した。そののち、骨を接合して頭蓋骨の復元を行った。

保存処理の終わった脳は、保存処理が終わって接合した頭蓋骨の中に納め、完成品とした。

発掘時点においても大脳回と大脳溝が認められたことから、大脳の一部分であることは明らかであったが、保存処理の完了した脳と頭蓋骨を観察することによって、脳は右大脳半球の一部で、左頭頂葉の一部であることが明らかになった。頭蓋骨の左半部分に右大脳半球が認められたことから、検出時にはすでに脳が1/4程度に収縮していたものと考えられる。左大脳半球は、頭蓋骨が横向き状態にあったので、腐敗が進んだものと考えられる。その反面、右大脳半球は頭蓋骨の右脳頭蓋の内面との間に間隙が生じ、このため、右大脳半球の脳回や脳溝が明瞭に保存されたものと考えられた。

２）２号墓の人骨

木棺の長軸方向は北～南である。木棺の北から頭蓋骨が検出され、脊椎は検出されていないものの、上肢や下肢の検出状況から判断して、東側に脊柱が位置して顔面が西を向いた状態で横臥位にて埋葬されていたものと考えられる。

左右の上腕は30～40度程度屈曲しており、肘関節は左右ともに60～70度程度屈曲しているようである。左右の股関節は約140～160度程度に強く屈曲しており、膝関節も140度を超える程度に極めて強く屈曲していたようである。

頭蓋骨では右側頭骨、右頭頂骨の一部、後頭骨、下顎骨の一部が検出されている。乳様突起

は破損があるが、その発達の程度は中等度と考えられる。

上顎骨は右側の前部が検出されており、一部の歯が釘植している。左上顎第１、２大臼歯は遊離歯として検出されている。この左上顎第１大臼歯の歯頸遠心側と左上顎第２大臼歯の歯頸近心側には、歯髄に及ぶ大きなカリエスが認められた。

下顎骨は前方から左下顎体にかけての部分が残存している。咬耗はかなり著明で、象牙質が全面に露出しているものが多く、下顎の切歯には咬耗が歯頸部近くまで及んでいる歯もある(Martin４度)。また、大臼歯は脱落しており、この部分に相当する歯槽は閉鎖している。

P_1	C	I_2	I_1	脱					M_1	M_2
P_1	C	I_2	I_1	I_2	I_1	C	P_1	P_2	閉	閉

四肢骨は骨端を欠くため、骨最大長は計測できないが、全体的に短い印象を受け、身長はそれほど高くはなかったものと考えられる。

上肢骨では、左右の上腕骨の骨体の部分が確認でき、前腕骨では右橈骨と左右の尺骨の骨体が同定できたにすぎない。また、手の骨では基節骨を中心に５点の指骨が検出されている。

下肢骨では、左右の大腿骨の骨体片、左右の脛骨の骨体部、腓骨片が確認できた。左右の大腿骨の粗線の発達の程度を比較すると、左大腿骨の粗線は右大腿骨よりも良く発達している。左脛骨は扁平であり、筋力がやや著しかったことがうかがえる。

本人骨の保存状況は不良であるが、四肢骨は概して大きく、筋の付着部も良く発達している。従って本人骨の性別は男性をうかがわせる。年齢は歯の咬耗度から推定して、熟年～老年と推定される。

３）３号墓の人骨

木棺の長軸方向は西北西～東南東である。木棺の西から頭蓋骨が検出され、南には長軸方向に沿って脊椎～骨盤にかけての残存骨が認められた。頭蓋骨の顔面は北を向いており、横臥位をとっている。

左右の上腕は30～60度程度屈曲しており、左肘関節は屈曲しておらず、直線状に伸びているようである。左右の股関節は約90度程度に屈曲しており、膝関節も130度程度に強く屈曲しているようである。

頭蓋骨は細片化が著しく、頭蓋骨から得られる情報は少ない。下顎骨では左側の一部が検出されている。左第２小臼歯と左第１大臼歯は下顎骨に釘植した状態で検出されているが、左第１小臼歯と左第３大臼歯は遊離歯として検出されている。また、右第１小臼歯と右第２小臼歯も遊離歯として検出されたものである。歯は全体的に小さく、女性のものであることをうかがわせる。咬耗はやや進んでおり、Martin分類の２度である。

P_2	P_1			P_1	P_2	M_1	M_3

上肢骨では、左上腕骨、左橈骨、左尺骨の一部が確認できたにすぎない。

下肢骨では、右大腿骨の一部が同定できたが、その他に大腿骨片や脛骨片が検出されている

が、左右の別を判定できない。

同定できた左上腕骨、右大腿骨は細く、女性骨をうかがわせる。歯の咬耗度から見て、本人骨の年齢は壮年～熟年と推定される。

3．おわりに

近世墓からの脳は、東京、京都、堺などで発見されており、そう珍しいものではない。しかし、山陰においては弥生時代の遺跡である青谷上寺地遺跡からの発見があるのみで、本遺跡の年代からの明瞭な脳の出土は極めて稀である。今回は樹脂置換による保存処理を試みたが、いずれ公開されることを願っている。

稿を終わるにあたり、本人骨の検討の機会を与えていただいた出雲市文化財課の各位、とりわけ出土状況の検討に有益な示唆をいただいた遠藤正樹氏及び坂根健悦氏に深謝申し上げる。

第２節　余小路遺跡出土木製品の樹種調査結果

汐見　真、白﨑泰子（㈱吉田生物研究所）

１．試料

試料は出雲市余小路遺跡から出土した服飾具５点、容器１点、祭祀具１点、部材７点、雑具１点の合計15点である。

２．観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

３．結果

樹種同定結果（針葉樹２種、広葉樹５種、タケ類１種）の表（表１）と顕微鏡写真（図34～39）を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）**マツ科マツ属［二葉松類］**（*Pinus* sp.）［遺物No.７Ｂ，９，10］《写真No.７Ｂ，９，10》

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で１～15細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。

マツ属［二葉松類］はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

２）**スギ科スギ属スギ**（*Cryptomeria japonica* D.Don）［遺物No.６］《写真No.６》

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。

スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

３）**ヤナギ科ハコヤナギ属**（*Populus* sp.）［遺物No.７Ａ］《写真No.７Ａ》

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～100㎛）が単独または２～４個放射方向に複合して分布する。軸方向柔組織は年輪界で顕著。柾目では道管は単穿孔と交互壁孔を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔はやや大きく、篩状になっている。板目では放射組織はすべて単列、高さ～450㎛であった。

ハコヤナギ属はヤマナラシ、ドロノキ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

４）**クルミ科クルミ属オニグルミ**（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. Sieboldiana Kitamura）［遺物No.11］《写真No.11》

散孔材である。木口では比較的大型の道管（～350㎛）が散在し、晩材部で径を減じる傾向にある。軸方向柔細胞は周囲状、および１細胞幅の接線状あるいは網状柔組織であ

る。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は１～４細胞列、高さ～600㎛であった。

オニグルミは北海道、本州、四国、九州に分布する。

５）**ユズリハ科ユズリハ属**（*Daphniphyllum* sp.）［遺物No.１～３］《写真No.１～３》

散孔材である。木口では極めて小さい道管（～50㎛）が単独または２～４個が複合して多数分布する。柾目では道管は階段穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織は平伏と方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状の壁孔がある。板目では放射組織は１～２細胞列、高さ～850㎛からなる。

ユズリハ属はユズリハ、ヒメユズリハがあり、本州（中南部）、四国、九州に分布する。

６）**ツバキ科ヒサカキ属**（*Eurya* sp.）［遺物No.４，５］《写真No.４，５》

散孔材である。木口では極めて小さい道管（～50㎛）が単独ないし２～４個複合して平等に分布する。柾目では道管は階段穿孔と側壁に対列ないし階段壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏、方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状壁孔が存在する。板目では放射組織は１～４細胞列で、高さ～５㎜からなる。木繊維の壁には有縁壁孔が一列に多数並んでいるのが全体で見られる。

ヒサカキ属はヒサカキ、ハマヒサカキがあり、本州（岩手、秋田以南）、四国、九州、琉球に分布する。

７）**イネ科タケ亜科**（Subfam. Bambusoideae）［遺物No.12～15］《写真No.12～15》

横断面では維管束がみられる。放射断面、接線断面では厚壁繊維の組織やその他の基本組織の細胞が稈軸方向に配列している。

タケ亜科は熱帯から暖帯、一部温帯に分布する。

８）**広葉樹**［遺物No.８］《写真No.８》

乾燥と収縮、形状上の問題で柾目しか切片が採取できなかった。柾目では道管が見られる。放射組織は直立と平伏細胞からなり異性である。

参考文献

島地　謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）

島地　謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎・村田　源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）

深澤和三　「樹体の解剖」海青社（1997）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）

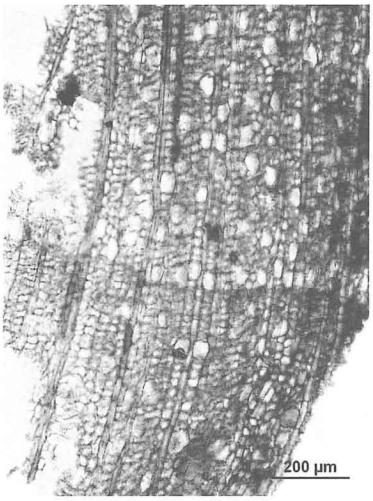
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

使用顕微鏡

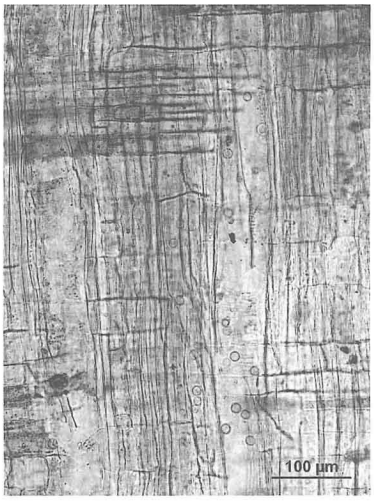
Nikon DS-Fi1

表１　出雲市余小路遺跡出土木製品同定表

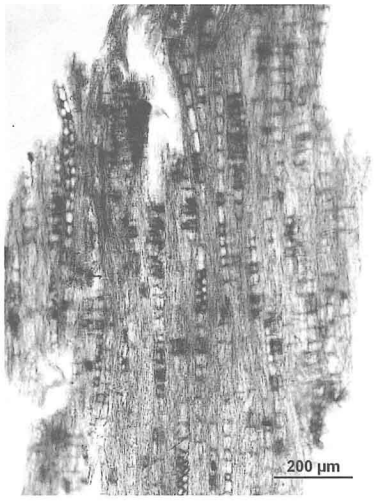
No.	品　　名	図番号	樹　　種
1	櫛（１号墓－①）	図11－３	ユズリハ科ユズリハ属
2	櫛（１号墓－②）	図11－４	ユズリハ科ユズリハ属
3	櫛（１号墓－③）	図11－５	ユズリハ科ユズリハ属
4	櫛（２号墓）	図15－４	ツバキ科ヒサカキ属
5	櫛（３号墓）	図19－４	ツバキ科ヒサカキ属
6	火きりうす（３号墓）	図19－５	スギ科スギ属スギ
7	Ａ折敷（底板）	図15－５	ヤナギ科ハコヤナギ属
	Ｂ　〃　（側板）		マツ科マツ属〔二葉松類〕
8	数珠玉	図11－22	広葉樹
9	１号墓　木棺　部材		マツ科マツ属〔二葉松類〕
10	２号墓　木棺　部材		マツ科マツ属〔二葉松類〕
11	３号墓　木棺　部材		クルミ科クルミ属オニグルミ
12	１号墓　木棺　部材		イネ科タケ亜科
13	２号墓　木棺　部材　⑧		イネ科タケ亜科
14	３号墓　木棺　部材		イネ科タケ亜科
15	２号墓　結束材		イネ科タケ亜科



木口

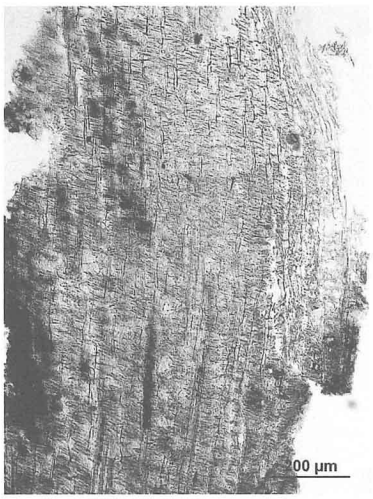


柾目

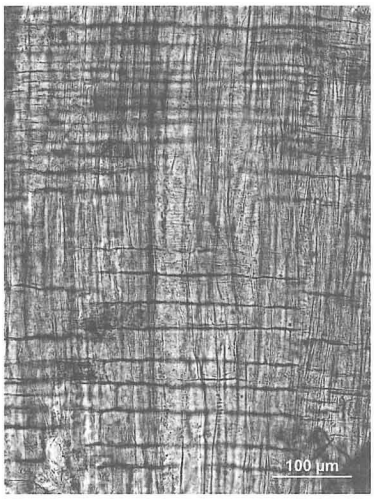


板目

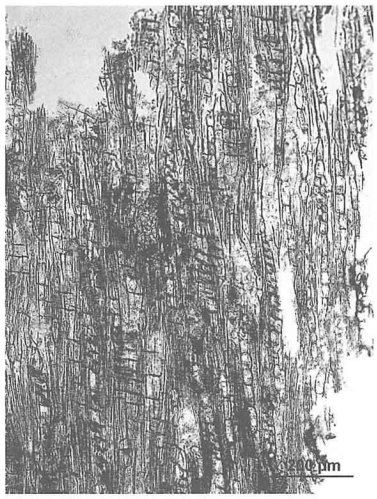
No－1　ユズリハ科ユズリハ属



木口

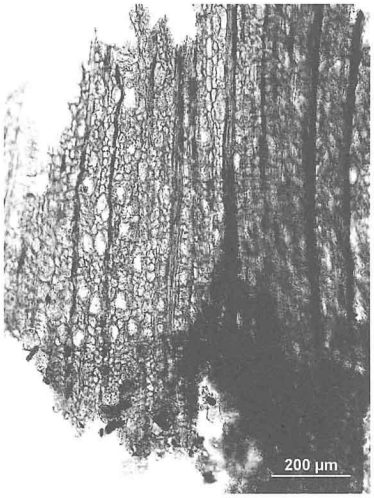


柾目

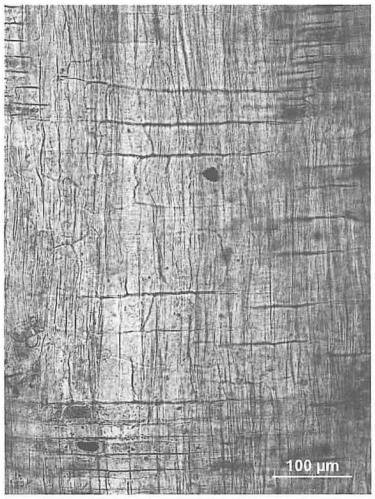


板目

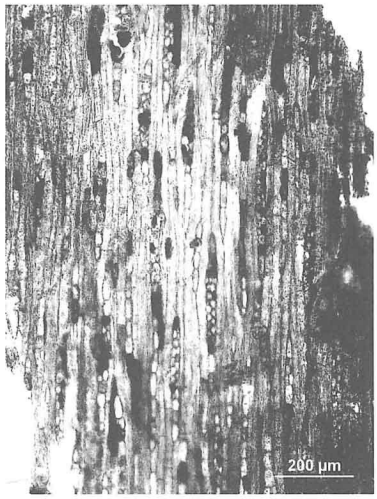
No－2　ユズリハ科ユズリハ属



木口



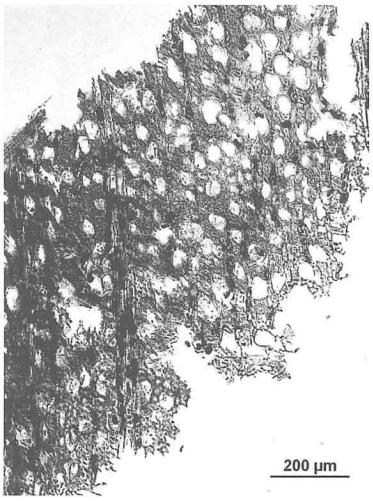
柾目



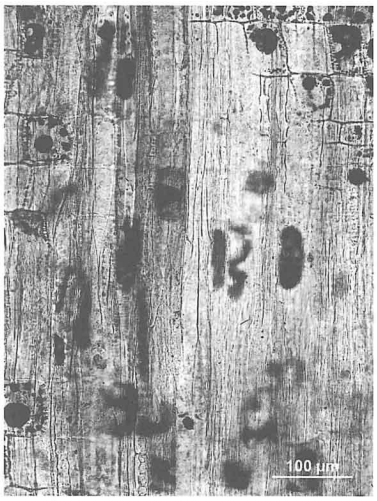
板目

No－3　ユズリハ科ユズリハ属

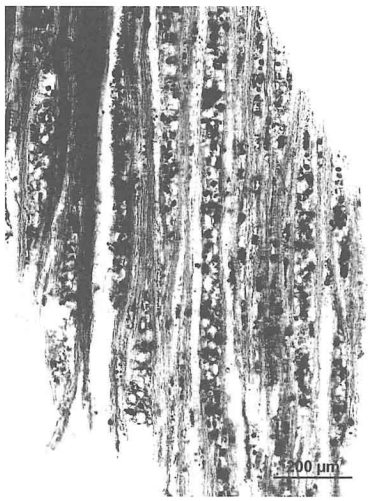
図34　顕微鏡写真（1）



木口

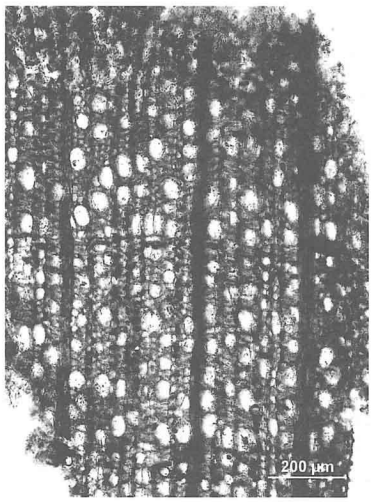


柾目



板目

No－4　ツバキ科ヒサカキ属

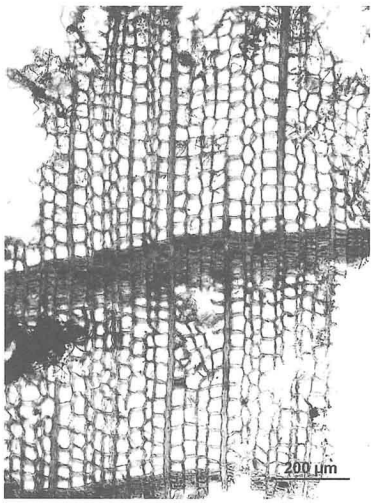


木口

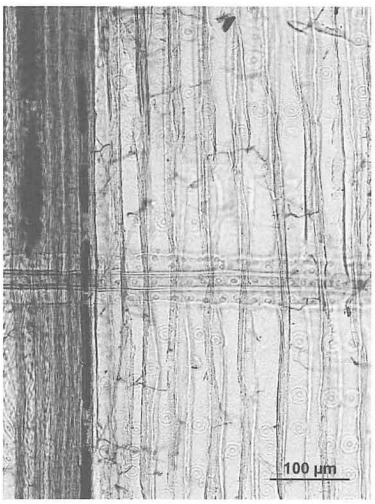
柾目

板目

No－5　ツバキ科ヒサカキ属



木口

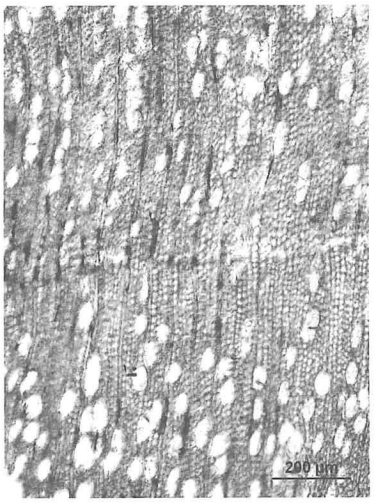


柾目

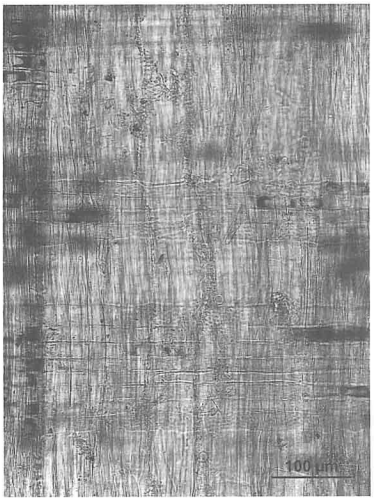
板目

No－6　スギ科スギ属スギ

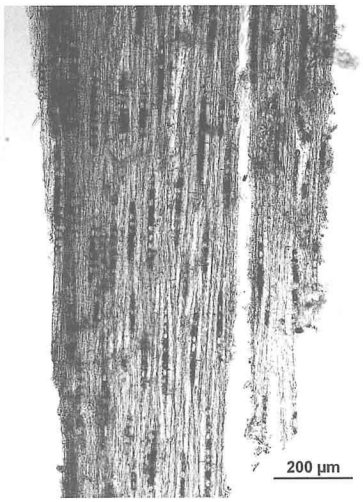
図35　顕微鏡写真（2）



木口

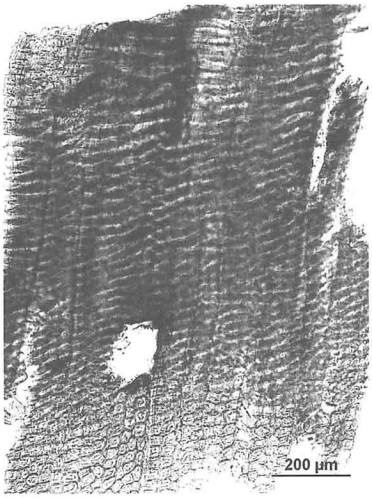


柾目

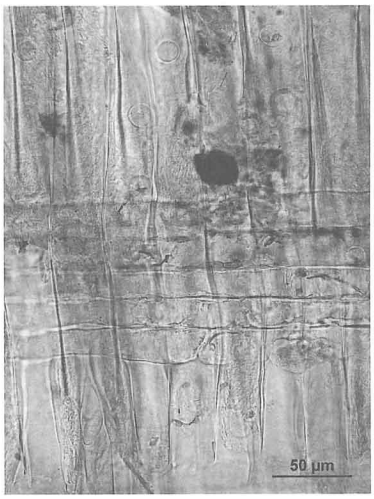


板目

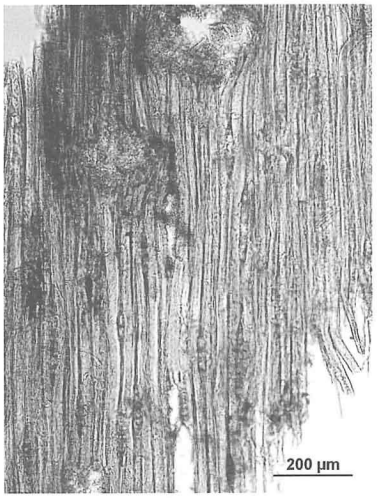
No－7A　ヤナギ科ハコヤナギ属



木口

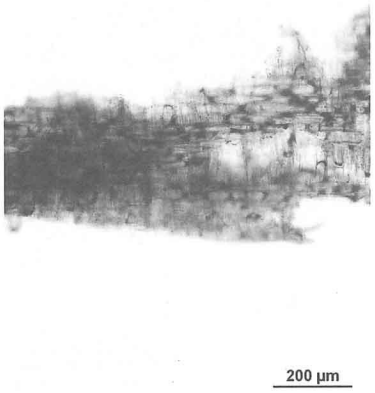


柾目



板目

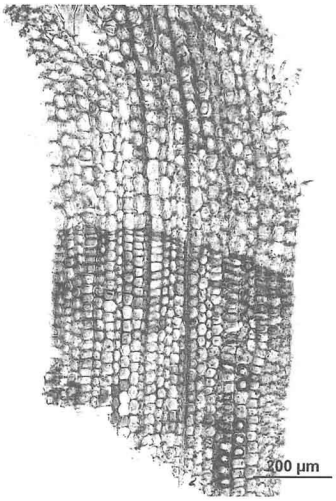
No－7B　マツ科マツ属〔二葉松類〕



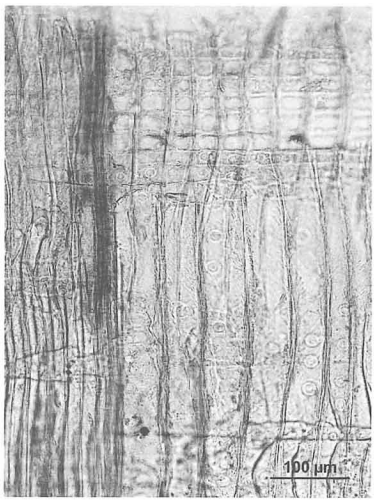
柾目

No－8　広葉樹

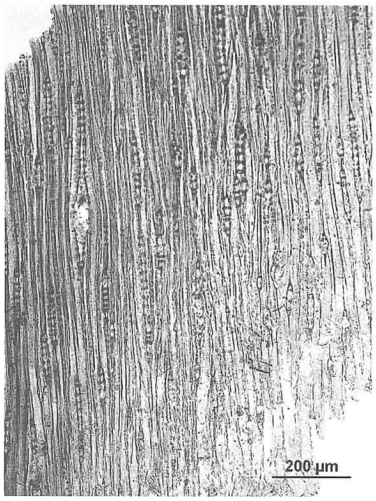
図36　顕微鏡写真（3）



木口

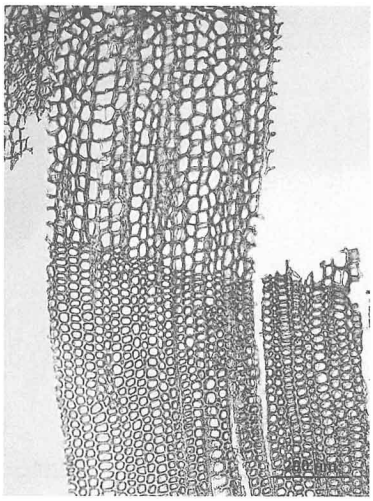


柾目

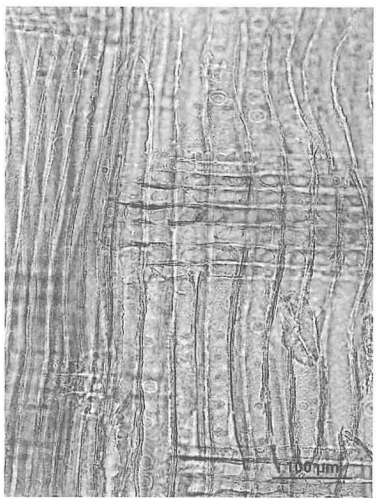


板目

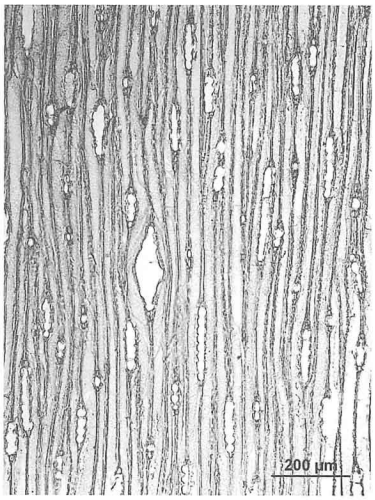
No－9　マツ科マツ属〔二葉松類〕



木口

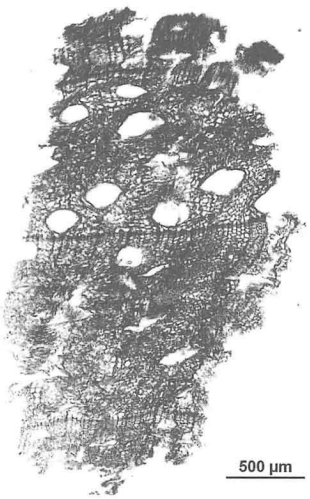


柾目

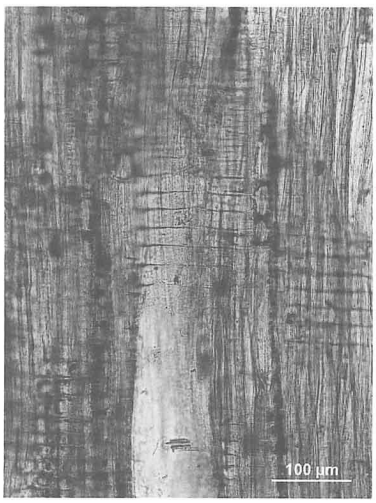


板目

No－10　マツ科マツ属〔二葉松類〕



木口

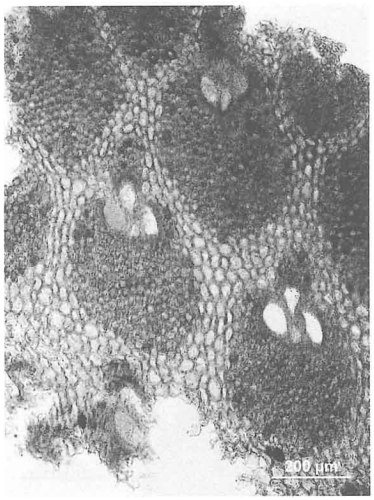


柾目

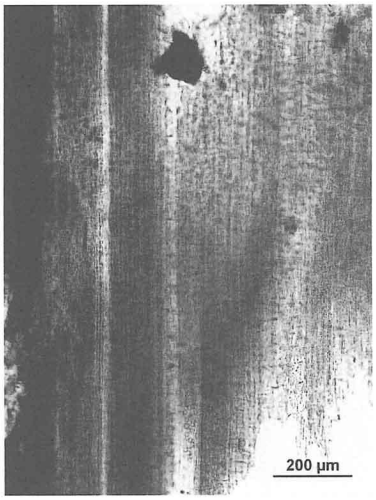
板目

No－11　クルミ科クルミ属オニグルミ

図37　顕微鏡写真（4）



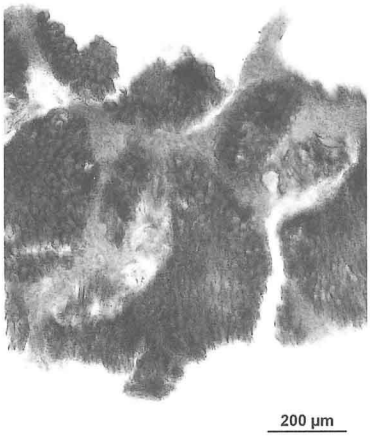
横断面



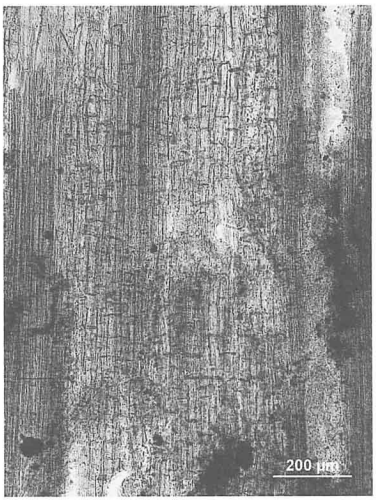
放射断面

接線断面

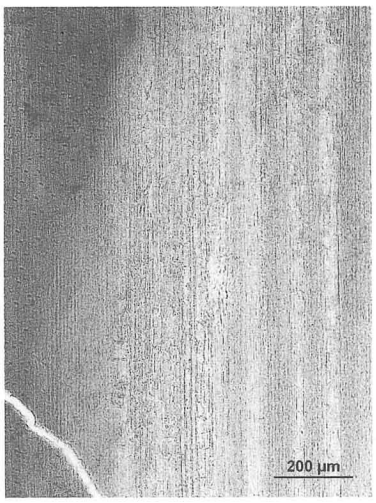
No－12　イネ科タケ亜科



横断面

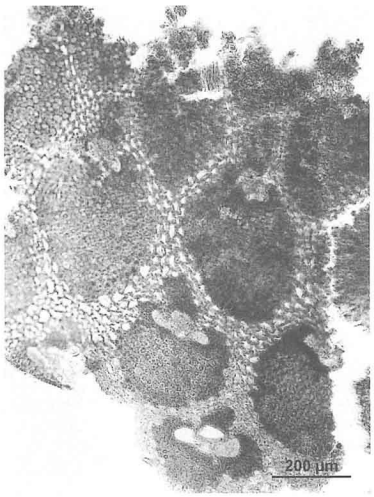


放射断面

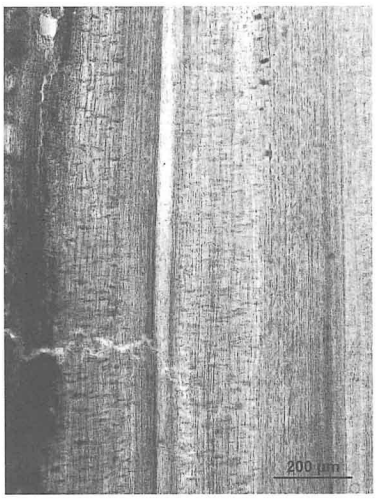


接線断面

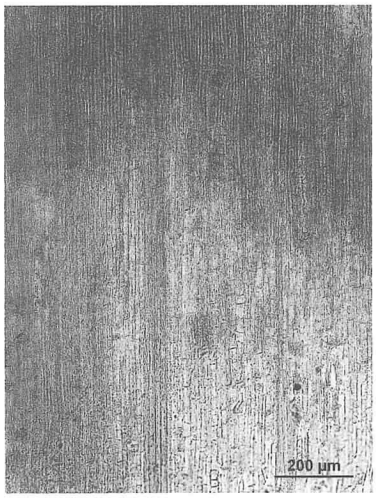
No－13　イネ科タケ亜科



横断面



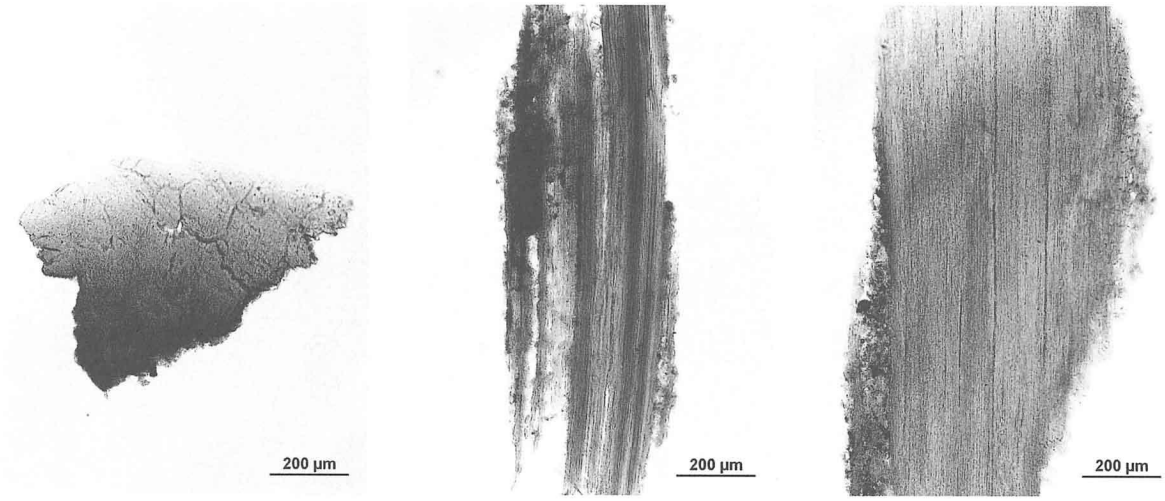
放射断面



接線断面

No－14　イネ科タケ亜科

図38　顕微鏡写真（5）



横断面　　放射断面　　接線断面

No－15　イネ科タケ亜科

図39　顕微鏡写真（6）

第３節　花粉分析の成果報告

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

１．はじめに

本報告は、出雲市文化観光部文化財課が「余小路遺跡内での農耕についての資料を得る。」「余小路遺跡が立地する微高地の形成過程についての資料を得る。」ことを目的として、文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した分析委託業務報告書の概要である。

２．分析試料について

図24（22－23頁）・図40に示す西区北壁の２地点で、試料採取を行った。

３．分析方法及び分析結果

(1)　微化石概査　　花粉分析用プレパラート、及び花粉分析処理残渣を用いて、植物片、微粒炭、珪藻、火山ガラス、植物珪酸体の含有状況を調べた。含有状況を、表２中の凡例に示した５段階にまとめている。

(2)　花粉分析　　処理は（渡辺1995）に従って行った。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。またイネ科花粉を、(中村1974)に従いイネを含む可能性の高い大型のイネ科(40㎛以上）と、イネを含む可能性の低い小型のイネ科（40㎛未満）に細分している。

分析結果を図41・42の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示した。統計処理に十分な量の木本化石が検出できなかった試料では、検出できた種類を「＊」で示した。また右端の花粉総合ダイアグラムでは木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本花粉、胞子の総数を加えたものを基数として、分類群毎に累積百分率として示した。

４．花粉分帯

解析にあたり、通常遺跡毎の「局地花粉帯」を設定し、花粉帯毎に古植生ほかの古環境解析を行なう。今回は、No.１地点でのみ統計処理に耐えうる量の木本花粉化石が検出され、しかも組成の変化がほとんどなかったことから、局地花粉帯の設定を行わなかった。

５．地形形成について

余小路遺跡周辺の等高線図（図40）から明らかなように、余小路遺跡は古神戸川（現塩冶赤川）の後背湿地に位置する。

余小路遺跡では、中世～近世の遺構のベースを成し、上面の標高が＋3.2m程度の「青灰色シルト層(以下、「S層」)」が広く分布していた。また、「Ｓ層」からは遺物が検出されていなかった。仮に「Ｓ層」上面が中世以前にこの標高を持つ微高地として存在していたとすると、微高地上に古代以前の遺構が残っていないことが不自然である。したがって、＋3.2mの「Ｓ層」上面

が中世以降に形成されたことになる。このことは、２つの可能性を示唆する。一つは「「Ｓ層」が中世あるいは直前に堆積した。」、もう一つは「「Ｓ層」上面が中世に削平を受けた。」という考えである。上面の削平が中世における河川氾濫に起因すると考えることもできるが、それ以前の遺構を完全に削平するほどの氾濫は考えにくい。したがって、「Ｓ層」が古神戸川の中世における河川氾濫に伴い堆積したものであると考えられる。

以上のことから、余小路遺跡の立地に関する次のような仮説が立てられる。

「余小路遺跡近辺は中世以前には古神戸川の後背湿地であった。中世に古神戸川の氾濫が起こり「Ｓ層」が堆積した。この後、神戸川の流路が変わり余小路遺跡がやや乾燥した状態になるとともに、人間活動の場となっていった。」

６．余小路遺跡における近世の農耕について

No.１地点において十分な量の花粉化石が検出できた層準からは、近世及び中世の遺物が検出され、近世に堆積したものと考えられる。また、今回得られた木本花粉化石群集では、マツ属（複維管束亜属）が卓越する。この花粉化石群集は、（大西1993）の中海－宍道湖地域の地域花粉帯で近世を示すイネ科花粉帯マツ属（複維管束亜属）亜帯と類似し、出土遺物からの推定と矛盾しない。

分析結果ではイネ科（40㎛以上）花粉が100％を超える高い出現率を示す。このことからこれらの層準堆積時に、調査地点あるいは近辺で稲作が行なわれていた可能性が極めて高い。検出量は多くはないがセリ科やキカシグサ属などの水田雑草を伴うことから、稲作は水田で営まれていた可能性がある。

一方でワタ、ソバのほか、アブラナ科、ソラマメ属などの畑作物を含む種類も検出される。しかし、ワタは大阪府下河内平野では「掻揚げ田」で栽培されるなど、水田の傍らで栽培されていた。ソバは水田の畦で栽培されたり、稲刈り後のわずかな期間に播種から刈り取りまでが可能であることから、これらが出現したことがそのまま畑の広がりを示唆するものではない。またアブラナ（ナタネ）、ソラマメは秋に蒔き春に刈り取る、水田の裏作物である。

以上のことから、余小路遺跡近辺では水田が広がり、休耕田や近くの畑ではワタが栽培されていたと考えられる。また秋から翌春にかけては畑が広がりアブラナやソラマメ、ソバが水田の裏作として栽培されていたと考えられる。

７．まとめ

(1) 得られた花粉組成は変化に乏しく、局地花粉帯の設定を行わなかった。

(2) 余小路遺跡周辺の等高線図（図40）から遺跡の立地を明らかにした。このことから、中世以降の遺構のベースを成す「Ｓ層」の堆積環境を推定することにより、遺跡内に中世を遡る遺構が存在しない原因を明らかにした。

(3) 余小路遺跡近辺での近世農耕の様子を推定した。特筆すべき事柄を以下に示す。

① 余小路遺跡近辺では水田が広がり休耕田や近くの畑ではワタが栽培されていたと考えられる。

② 秋から翌春にかけては畑が広がりアブラナやソラマメ、ソバが水田の裏作として栽培されていたと考えられる。

引用文献

大西郁夫　1993「中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分帯と植生変化」『地質学論集』39，PP・33－39。

中村　純　1974「イネ科花粉について，とくにイネを中心として」『第四紀研究』13，PP・187－197。

渡辺正巳　1995「花粉分析法」『考古資料分析法』84・85，ニュー・サイエンス社。

表２　微化石概査結果

地点No.	試料No.	花　粉	炭	植物片	珪　藻	火山ガラス	プラント・オパール
1	1	○	○	△	△	○	○
	2	◎	○	△	△	◎	◎
	3	◎	○	△	△	○	○
	4	△×	○	△×	△	◎	○
2	1	△×	○	△×	△	○	○
	2	△×	○	△×	△	○	○

凡例　◎：十分な数量が検出できる　○：少ないが検出できる
△：非常に少ない　△×：極めてまれに検出できる　×　：検出できない

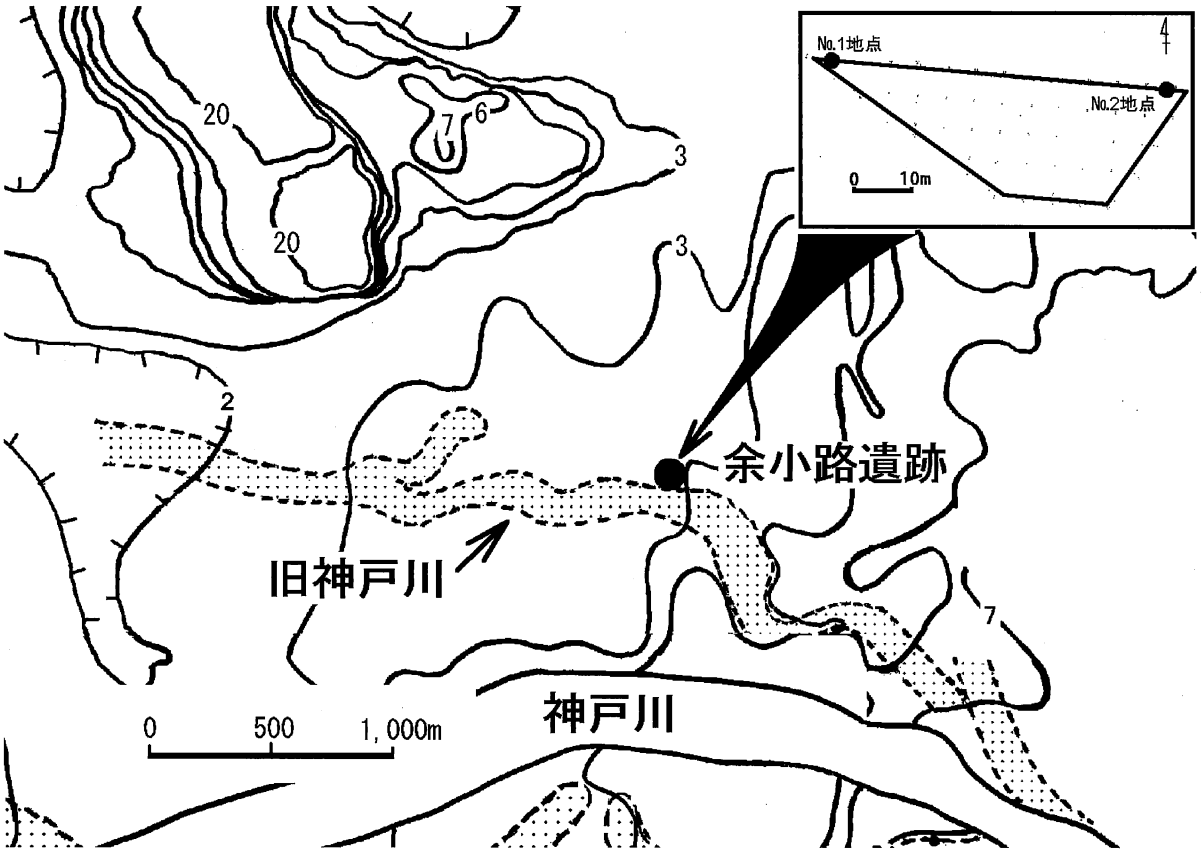


図40　余小路遺跡近辺の等高線図とトレンチ内試料採取地点

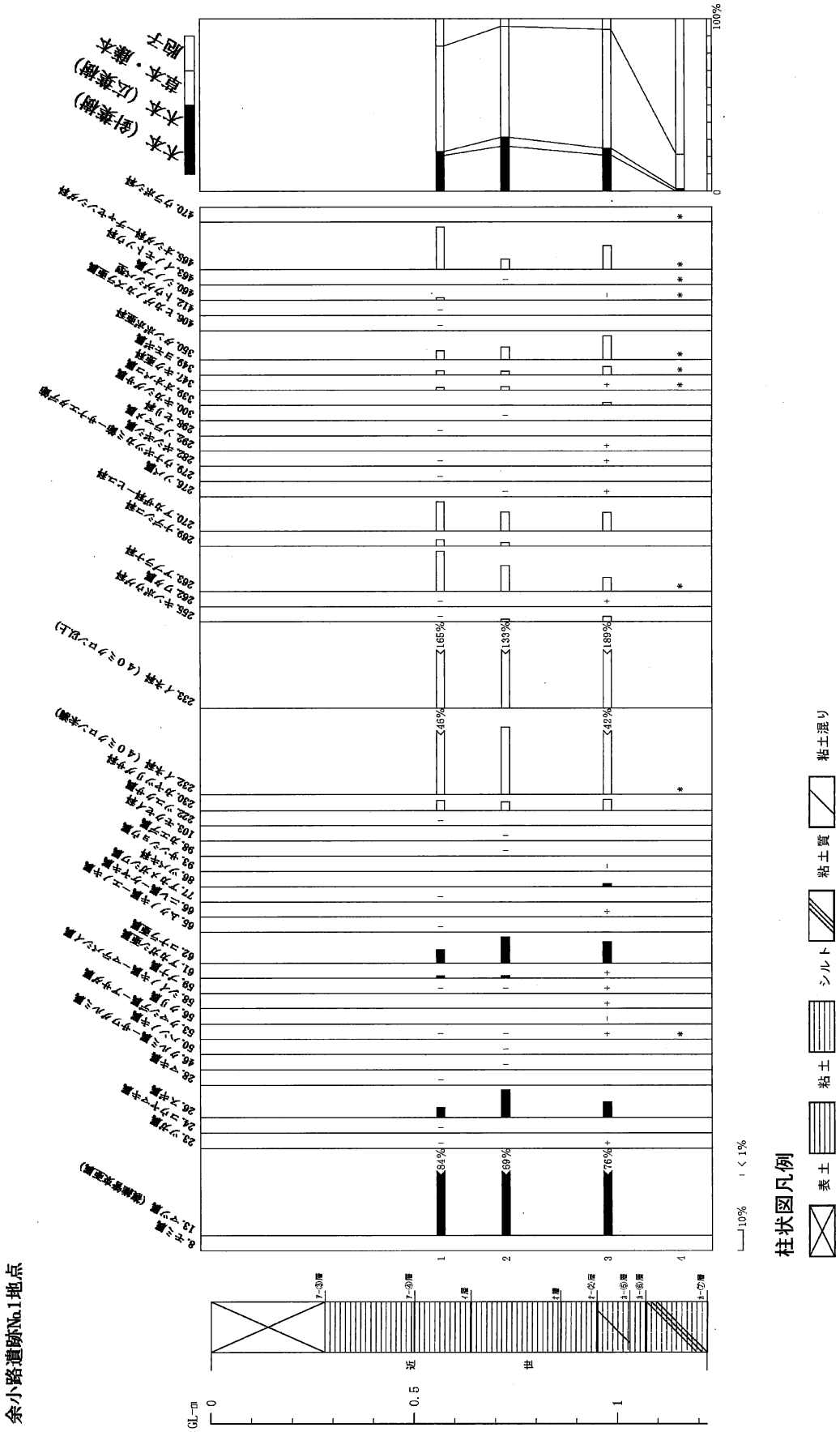


図41　No. 1 地点の花粉ダイアグラム

余小路遺跡No.2地点

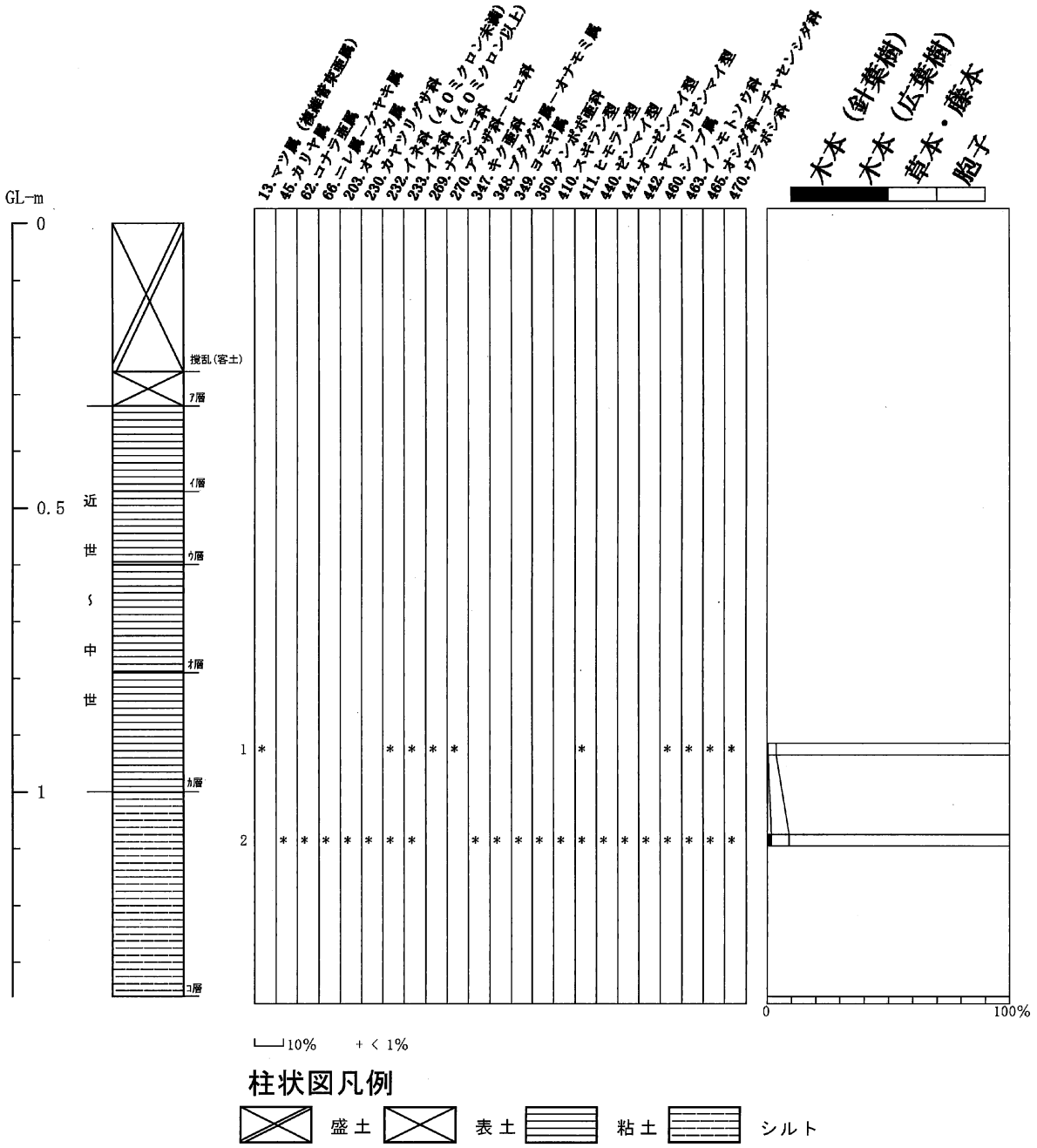


図42　No.２地点の花粉ダイアグラム

第5章　結　語

平成16・17年度におこなわれた島根県の調査では、その成果として余小路遺跡をⅠ期～Ⅳ期の遺構変遷でとらえた（宮澤ほか2007、第３章第１節参照）。今回もこれによりながら平成18年度に出雲市がおこなった余小路遺跡の調査成果をまとめてみたい。

Ⅰ期以前（16世紀後半以前）　東区西区とも、この時期の明確な遺構はなかったが、わずかに遺物が出土している。図２に示したように、出雲市の調査区を含めて余小路遺跡は、旧神戸川の河道跡から北側自然堤防に立地している。住居や墓地といった土地利用がなされていたかは、今後の調査に期待したい。

Ⅰ期（16世紀後半から17世紀前半）　島根県の調査では、Ⅰ区では建物群と溝（２号）、Ⅱ区では溝（25号）をこの時期としている。出雲市調査区では、東区西区ともこの時期の遺構はなかった。県調査Ⅱ区でも、Ⅱ期（16世紀後半）の遺物は西北部の微高地周辺に限られているので、そこから離れた出雲市東区や西区に遺物・遺構がないこともうなずける。

Ⅱ期（17世紀前半から17世紀中頃）　島根県の調査では、Ⅰ区には引き続き建物群がありその北に東西方向の道路がある。Ⅱ区には南をのぞく三方を溝で区画された方形の敷地内に、８号・９号建物が建っている。Ⅰ区道路の北側溝（５号溝）からは伊藤分類Ａ類とＣ類（宮澤ほか2007）の土師質土器皿が出土した。

出雲市の東区にある木棺墓３基は、いずれも土師質土器皿を副葬していた。これらはすべて、伊藤分類Ａ類である。これに対して、県調査Ⅱ区の木棺墓から出土した皿はすべてＤ類であった。さらに、県調査Ⅱ区の木棺墓と東区のそれを比較すると、Ⅱ区の木棺墓は底板をもった箱形木棺か桶形木棺であり、竹組を底にした本報告の木棺墓とは棺の型式に大きな違いがある。副葬品も、残存状況の違いはあろうが、皿以外に共通するものがなく、品目の違いは明らかだ。

県Ⅱ区の木棺墓はすべて、Ⅳ期とされているが、本報告の東区木棺墓は、出土土器からみて、Ⅱ期に位置づけてよいと判断する。

Ⅲ期（17世紀中頃から17世紀後半）　県調査Ⅰ区の道路側溝は最終的にはこの時期に埋没した。Ⅱ区では区画溝がこの時期も機能し、そのなかに建物（８号）がある。

Ⅳ期（17世紀後半以降）　県調査Ⅱ区に11号建物のほか、木棺墓および火葬墓がある。

今回の調査区には、Ⅲ・Ⅳ期と明確に判断できる遺構はなかった。

以上のように、今回は、17世紀前半（Ⅱ期）の木棺墓３基以外には顕著な遺構は見いだせなかったが、県調査Ⅱ区で確認された墓域がさらに南東に広がることを明らかにできた。また、西区の土壌分析成果によれば、周辺には水田が広がり、近くの畑ではワタが栽培されてい、秋から翌年の春にかけては、水田の裏作としてアブラナやソラマメ、ソバが栽培されていた、といった景観の復元もなされた。

さて、遺跡の東南約900mには、浄土真宗寺院の願楽寺（出雲市白枝町）がある。寺伝や記録によると、願楽寺は永正六年（1509）、近江から来た教知が神西村に営んだ西本坊を起源とし、慶長九年（1604）（一説に永禄十年（1567））に４世の教念が現在地の白枝に移して「願楽寺」と称したという（永田1993）。また、これに隣接する真宗寺も慶長元年（1596）開創という。

これらの寺院開基記録は、16世紀末から17世紀にかけ、周辺の開発が進展したことにともなうものであろう。そして、それは、余小路遺跡の変遷とも重なりをもつものであり、木棺墓の型式変化も、あるいは宗派の違いなどをその背景として考慮すべきかもしれない。

永禄五年（1562）、石見国および石見銀山をおさえた毛利元就は、尼子氏本拠地の富田（とだ）城（安来市広瀬町）をめざして進軍した。翌、永禄六年（1563）の白鹿（しらが）城（松江市法吉町）攻防戦があり、永禄七年（1564）には富田城包囲網が強化される。そして、ついに永禄九年（1566）十月には富田城は落城した。その後、元亀二年（1571）あたりまで出雲国内は戦乱状態にあったらしいが、天正六年（1578）に尼子勝久が自害、山中鹿之助幸盛も斬首されるとそれらも納まり、慶長五年（1600）に毛利氏が防長へ引き退いた頃には、平静をとりもどしたのであろう。

余小路遺跡の隆盛、つまり居住域や農耕地の拡大も、戦国時代の戦乱が終結し出雲平野へふたたび開発の手がおよぶという、この時代の風に後押しされていたのである。

参考文献

森山茂樹ほか編　1973『出雲市三十年誌』出雲市役所。

大社町史編集委員会　1991『大社町史』上巻、大社町。

永田滋史　1993『出雲市の寺々（上）』出雲市民文庫11、出雲市教育委員会。

永田滋史編　1997『神戸川探訪』出雲市民文庫15、出雲市教育委員会。

角田徳幸ほか　2006『中野清水遺跡（3）白枝本郷遺跡』一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書７、国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会。

野々村安浩編　2006『出雲国風土記の研究Ⅲ　神門水海北辺の研究（資料編）』島根県立古代文化センター調査研究報告書34、島根県古代文化センター。

宮澤明久ほか　2007『余小路遺跡・小畑遺跡』一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書８、国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会。

付表１　東区１号墓出土数珠計測表

（単位　径・厚さ㎜、重量ｇ）

挿図番号	長　径	短　径	厚　さ	孔　径	現重量	備　考
11－6	6.1	6.1	5.2	2.0	0.34	ガラス
7	6.0	6.0	4.7	2.0	0.37	ガラス
8	7.5	7.5	4.6	2.0	0.38	ガラス
9	5.7	5.7	5.1	2.0	0.35	ガラス
10	5.6	5.1	6.1	2.0	0.30	ガラス
11	5.2	5.2	6.3	2.0	0.31	ガラス
12	6.2	5.7	6.0	2.0	0.39	ガラス
13	6.3	5.2	5.1	2.0	0.46	ガラス
14	5.6	5.1	7.1	1.9	0.33	ガラス
15	6.1	6.1	4.5	1.8	0.28	ガラス
16	6.2	6.2	5.1	2.0	0.36	ガラス
17	6.0	6.0	5.2	1.9	0.33	ガラス
18	6.1	6.1	4.6	2.0	0.32	ガラス
19	5.6	5.1	5.0	2.0	0.30	ガラス
20	6.1	6.1	5.3	1.9	0.31	ガラス
21	5.2	5.9	5.0	1.8	0.26	ガラス
平均値	6.0	5.8	5.3	2.0	0.34	

付表２　東区２号墓出土数珠計測表

（単位　径・厚さ㎜、重量ｇ）

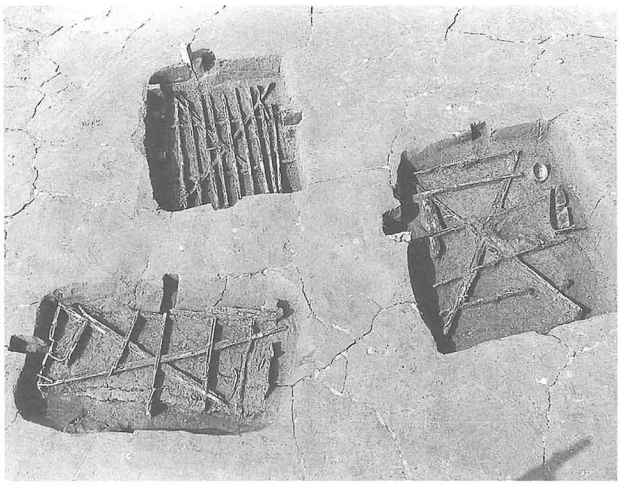
挿図番号	長　径	短　径	厚　さ	孔　径	現重量	備　考	指図番号	長　径	短　径	厚　さ	孔　径	現重量	備　考
15－1	5.7	4.8	1.9	1.0	0.02	木	25	6.7	4.9	3.0	1.0	0.04	木
2	5.9	4.7	2.5	1.0	0.02	木	26	残存 6.0	5.1	3.5	1.0	0.06	横欠損木
3	5.3	4.7	3.2	1.0	0.03	木	27	4.2	5.7	2.7	1.0	0.02	木
4	6.5	4.9	2.9	1.0	0.03	木	28	5.1	4.3	2.2	1.0	0.03	木
5	5.1	4.0	1.7	1.0	0.01	木	29	残存 5.5	5.2	2.4	1.0	0.02	1/3欠損木
6	6.0	5.2	2.4	1.0	0.03	木	30	6.1	4.5	2.2	1.0	0.02	木
7	5.9	4.9	1.5	1.0	0.02	木	31	5.5	4.3	2.1	1.0	0.02	木
8	6.1	4.5	2.2	1.0	0.02	木	32	6.5	5.8	2.3	1.0	0.04	木
9	5.2	5.0	2.1	1.0	0.03	木	33	5.7	4.5	2.0	1.0	0.03	木
10	6.1	5.1	2.6	1.0	0.03	木	34	6.0	5.1	2.0	1.0	0.03	木
11	5.5	4.7	2.5	1.0	0.03	木	35	6.3	4.1	2.1	1.0	0.03	木
12	6.1	4.6	2.1	1.0	0.03	木	36	6.5	4.6	残存 1.5	1.0	0.02	半欠損厚さ不明木
13	5.5	4.5	1.9	1.0	0.02	木	37	6.2	4.1	2.0	1.0	0.02	木
14	4.7	4.1	1.5	1.0	0.01	木	38	5.0	4.3	2.2	1.0	0.02	木
15	4.2	3.2	1.5	1.0	0.01	木	39	4.8	残存 5.0	1.9	1.0	0.02	横欠損木
16	6.3	4.2	2.1	1.0	0.01	半欠損木	40	6.3	4.7	2.0	1.0	0.03	木
17	8.8	8.2	残存 3.0	0.9	0.06	半欠損厚さ不明木	41	5.6	4.4	3.1	1.0	0.02	木
18	6.1	6.2	2.2	0.9	0.01	木	42	4.2	5.7	4.1	1.0	0.03	木
19	6.3	5.7	3.0	1.0	0.02	木	43	5.6	4.0	2.1	1～2	0.03	木
20	6.1	5.3	4.2	1.0	0.05	木	44	5.4	4.5	2.1	1.0	0.03	木
21	6.2	4.3	2.9	1.0	0.02	木	45	残存 4.5	残存 4.0	残存 2.0	1.0	0.02	木
22	5.2	4.3	2.5	1.0	0.03	木	46	5.4	4.3	1.8	1.0	0.02	木
23	4.3	5.8	2.1	1.0	0.02	木							
24	6.5	4.2	2.0	1.0	0.02	木	平均値	5.7	4.8	2.4	1.0	0.03	

写　真　図　版

東区全景（南西から）

木棺墓検出状況（南西から）

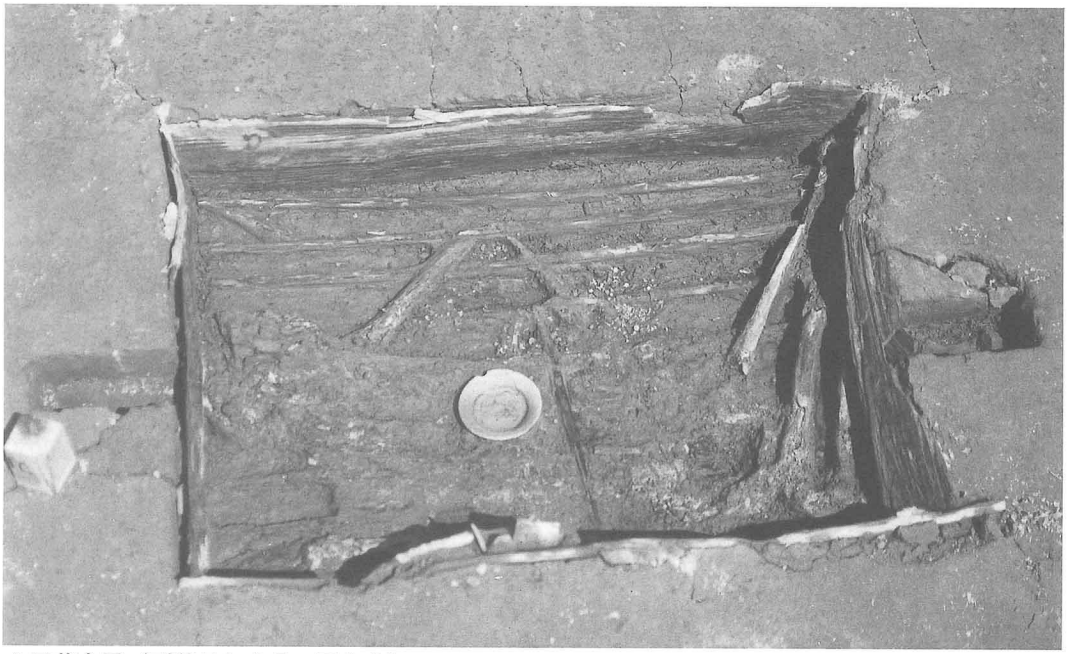
木棺墓全景１（南から）



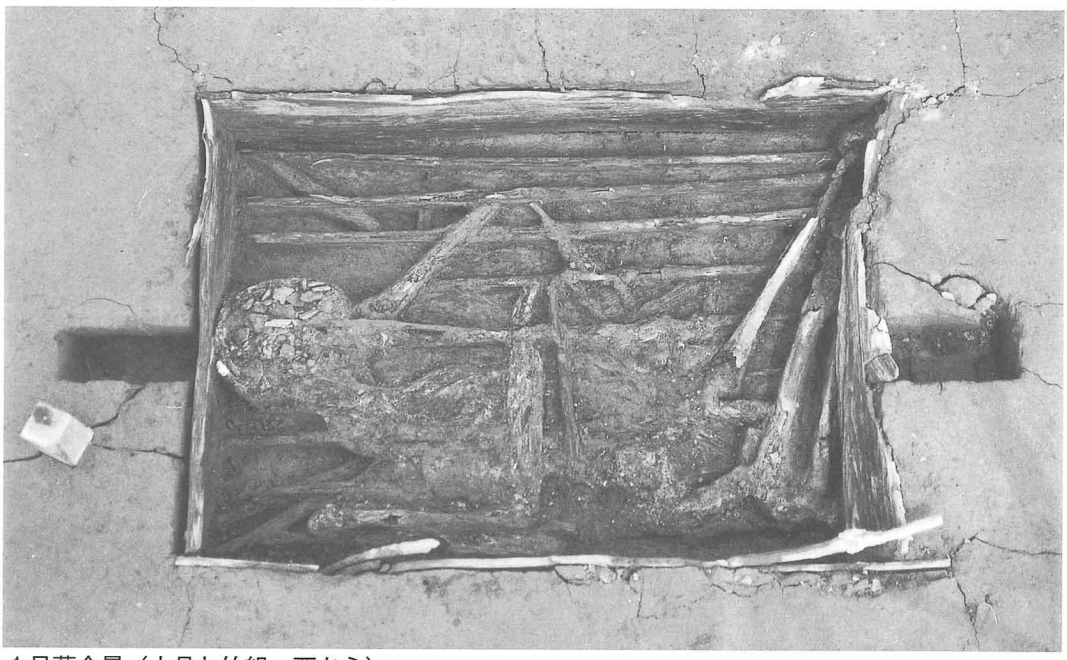
木棺墓全景２（南から）

木棺墓調査状況

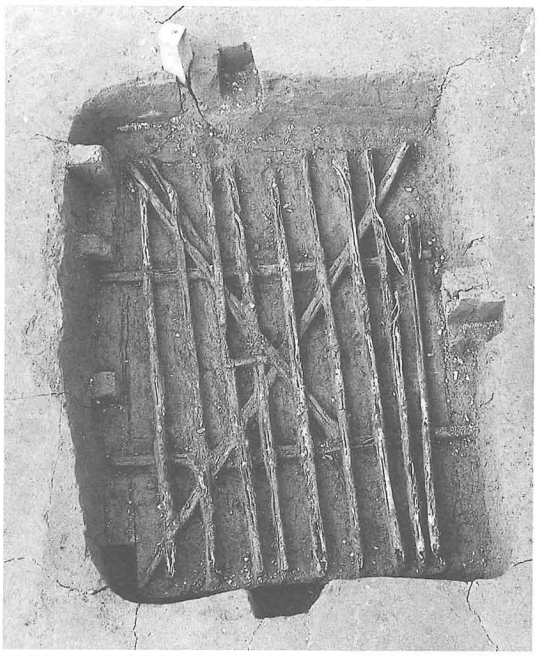
図版２　東区（2）　１号墓



１号墓全景（副葬品と人骨、西から）



１号墓全景（人骨と竹組、西から）



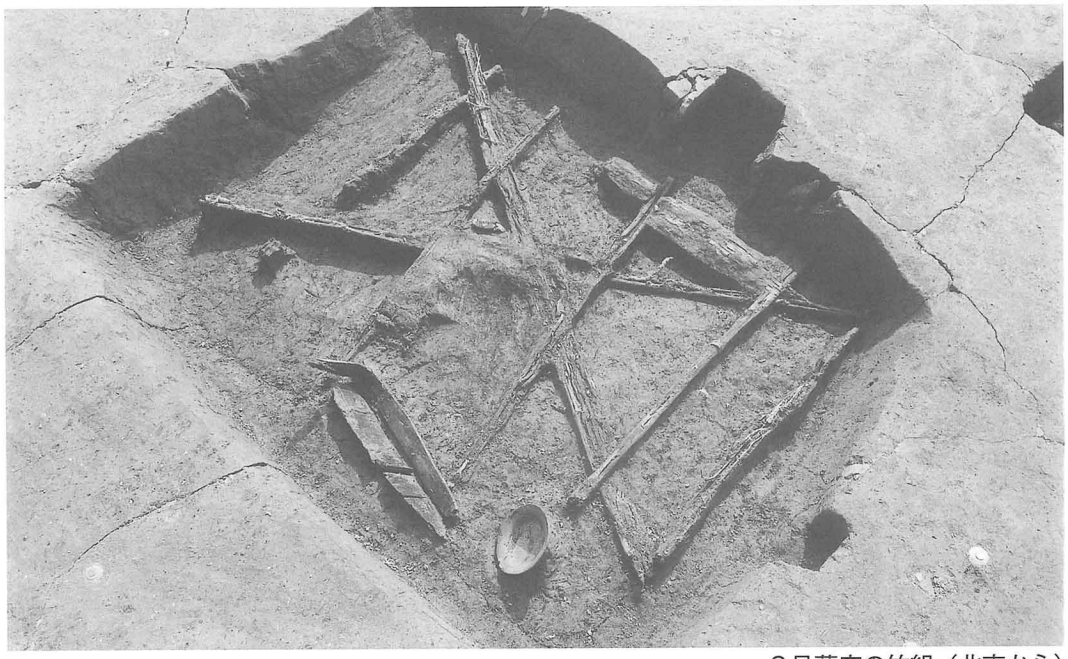
１号墓底の竹組（南から）

数珠玉の出土状況（西から）

頭蓋骨内部の脳組織（東から）

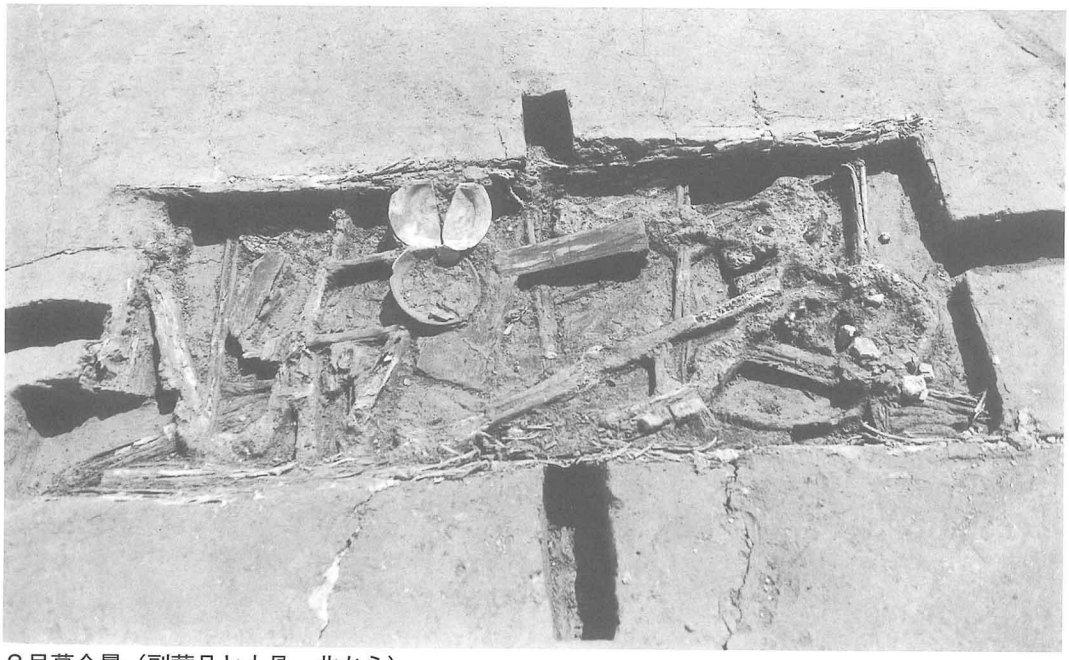
２号墓全景（西から）

２号墓の副葬品出土状況（南から）

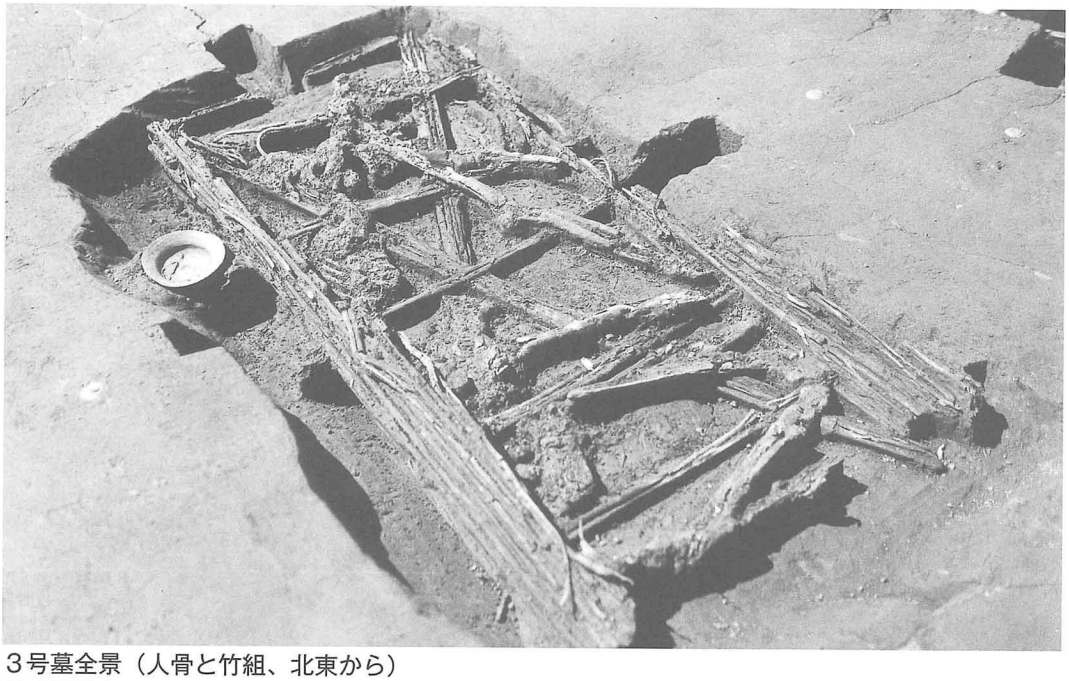


２号墓底の竹組（北東から）

図版４　東区（4）　３号墓ほか



３号墓全景（副葬品と人骨、北から）



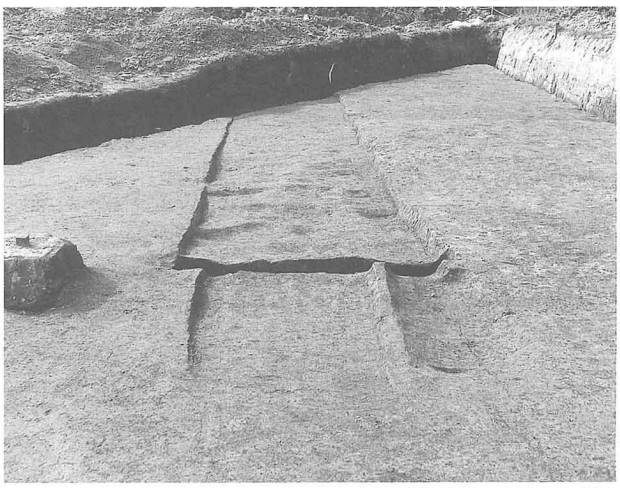
３号墓全景（人骨と竹組、北東から）

３号墓竹組（東から）

東西溝ＳＤ04（東から）

西区全景（西から）

落ち込みＳＸ01（東から）



東西溝ＳＤ03（東から）

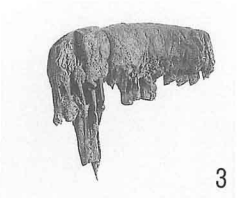
南北溝ＳＤ04・05（南から）

東西溝ＳＤ07（西から）

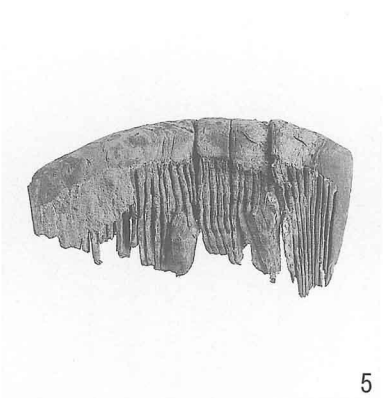
図版６　出土遺物（1）

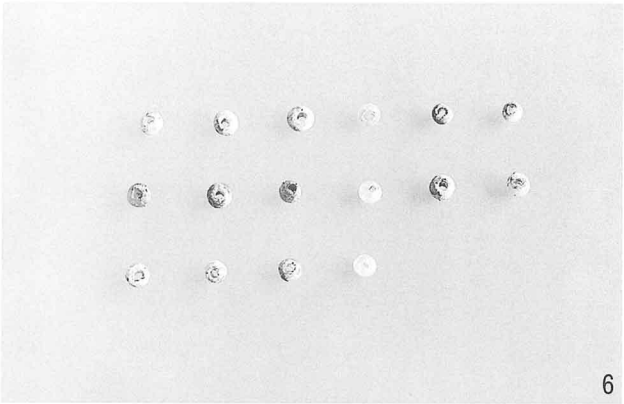
1

2


3

4


5

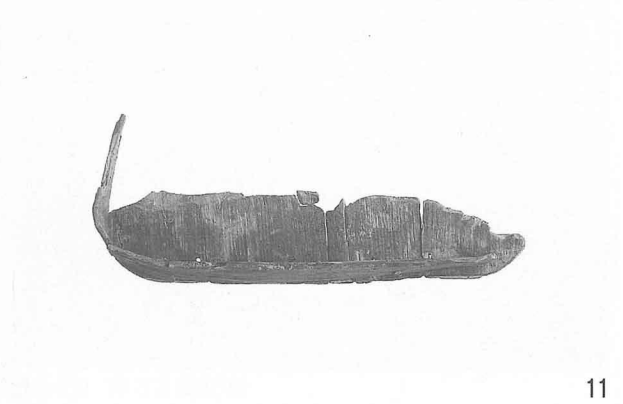

6

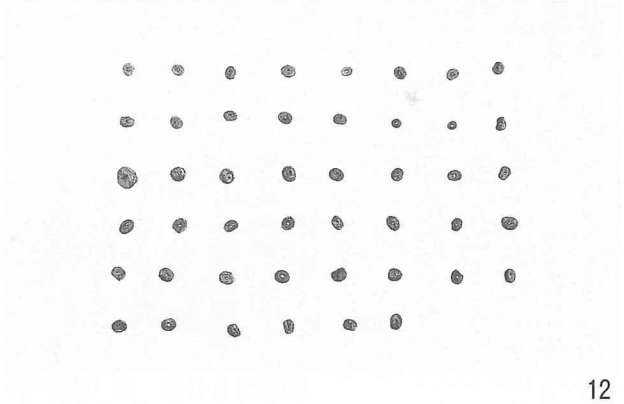
7

8

9

10


11

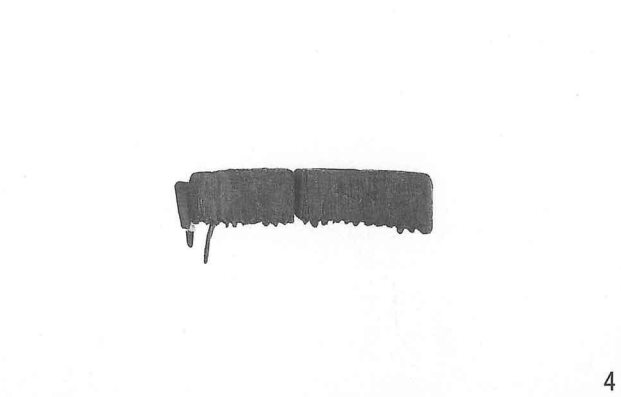

12

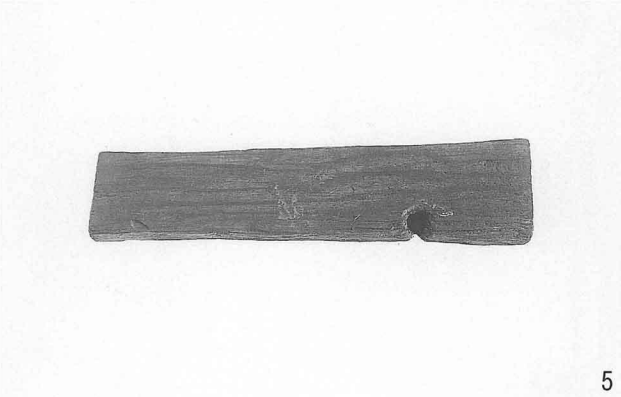
1～6：1号墓、7～12：2号墓（1～5・7～10=1：2、6・12=2：3、11=1：5）

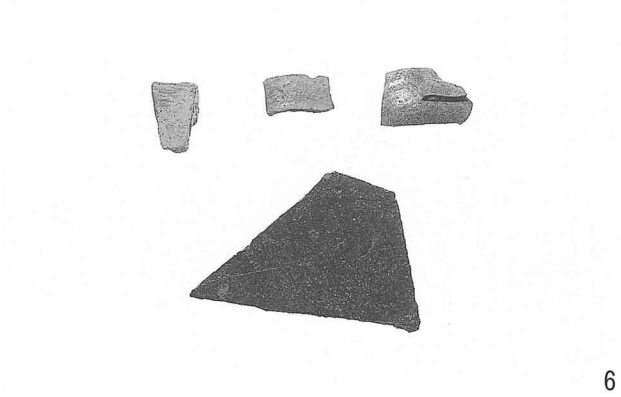
1

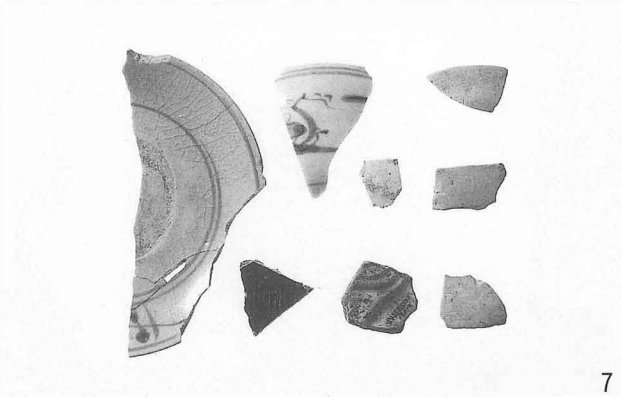
2

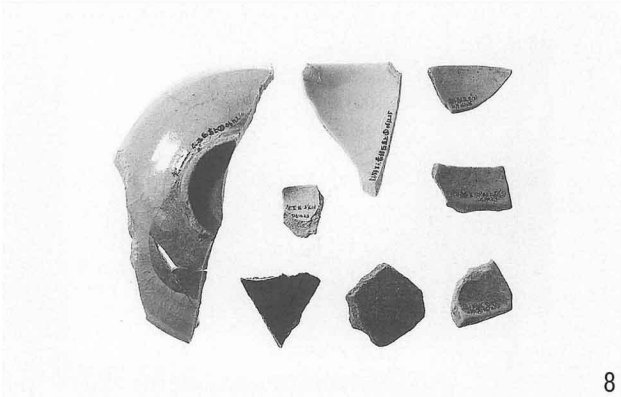
3

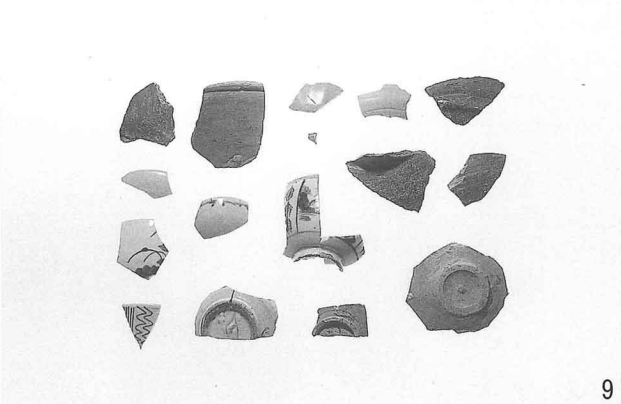

4

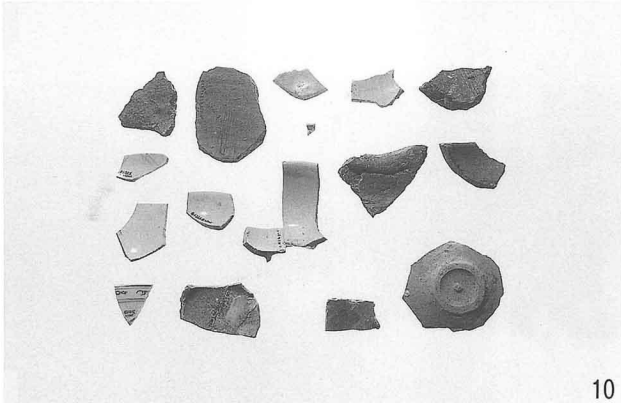

5


6


7


8


9


10

１～５：３号墓、６：東区、７～10：西区（１～４＝１：２、５～10＝１：３）

報 告 書 抄 録

フリガナ	ヨショウジイセキ
書名	余小路遺跡
副書名	神戸川(赤川)広域基幹河川改修事業埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	出雲市の文化財報告
シリーズ番号	2
編集者名	花谷　浩、坂根健悦
編集機関	出雲市文化観光部文化財課
所在地	〒693-0002　島根県出雲市今市町北本町３丁目２－１ ℡0853-21-6893
発行年月日	平成20年(2008)３月30日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
余小路遺跡(よしょうじいせき)	島根県出雲市松寄下町	3220		35度21分36秒	132度43分37秒	東区:平成18年(2006)6月19日～8月31日、西区:平成18年(2006)8月18日～12月28日	1350㎡	河川改修
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
余小路遺跡	集落	室町時代 江戸時代	木棺墓、溝、土坑		土師質土器・陶磁器・木製品・ガラス玉・人骨		中世から近世にかけての集落・墓地遺跡	

出雲市の文化財報告　2

余小路遺跡

神戸川(赤川)広域基幹河川改修事業
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年（2008）３月発行

発行　島根県出雲県土整備事務所
　　出雲市教育委員会
編集　出雲市文化観光部文化財課
　　〒693-0002　島根県出雲市今市町北本町
　　３丁目２－１
　　Tel　0853－21－6893
　　Fax　0853－21－6617

印刷　綜合印刷株式会社